圖入說明

新型編物と手藝

594
089-4
324

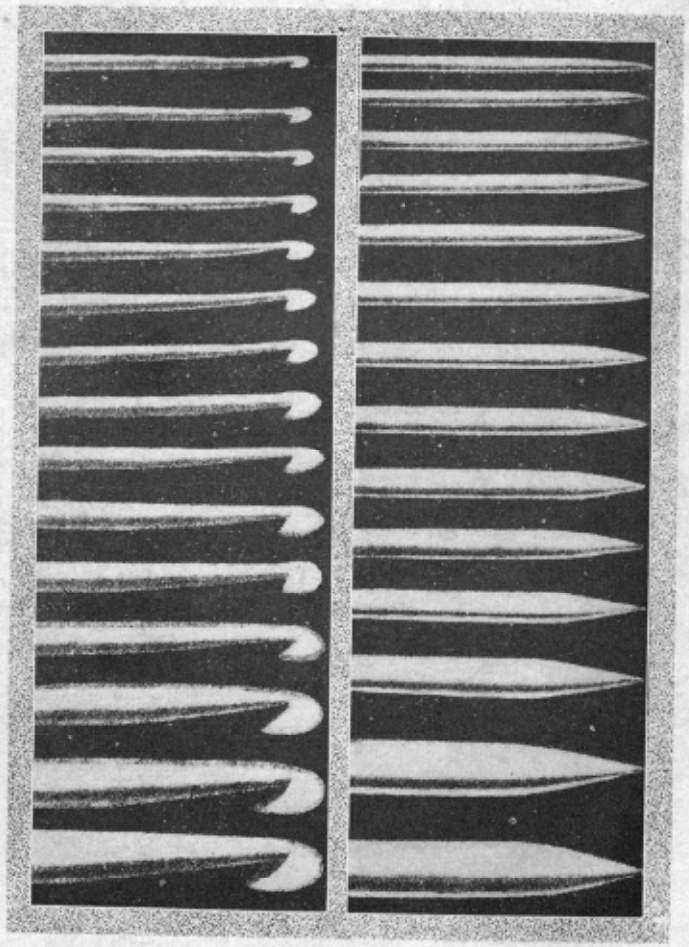
圖入説明

新型編物と手藝

大妻技藝女學校々長
大妻コタカ先生著

東京
大興社版

編物用具

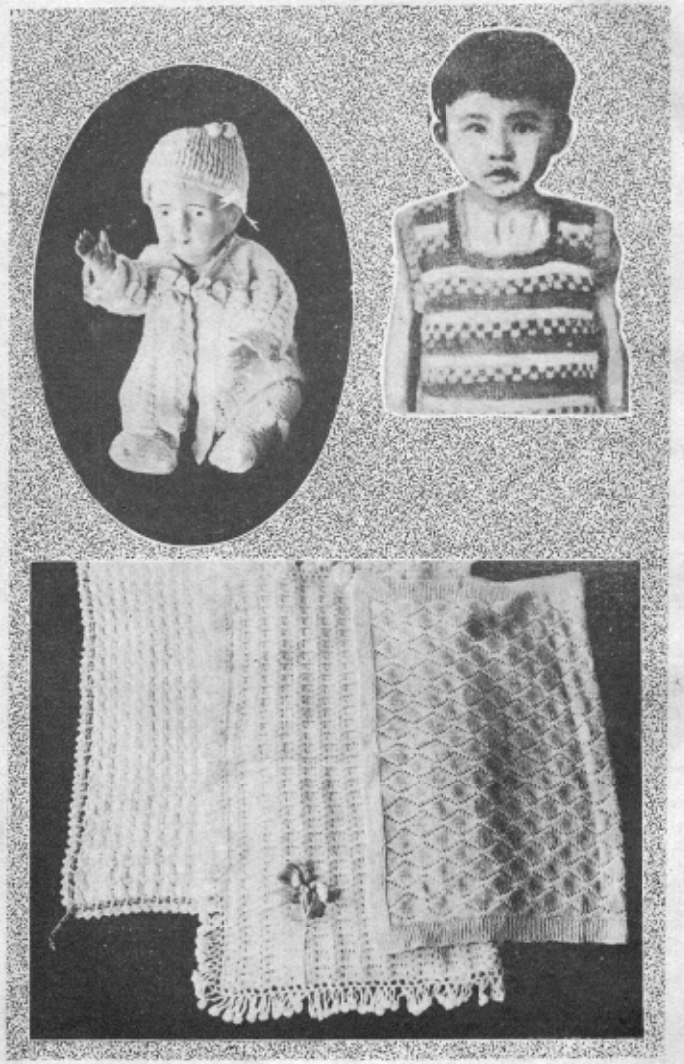


ちか上共方兩は吋(針鈎・左)(針本二・右)
15・14・13・12・11・10・9・8・7・6・5・4・3・2・1・0

3421

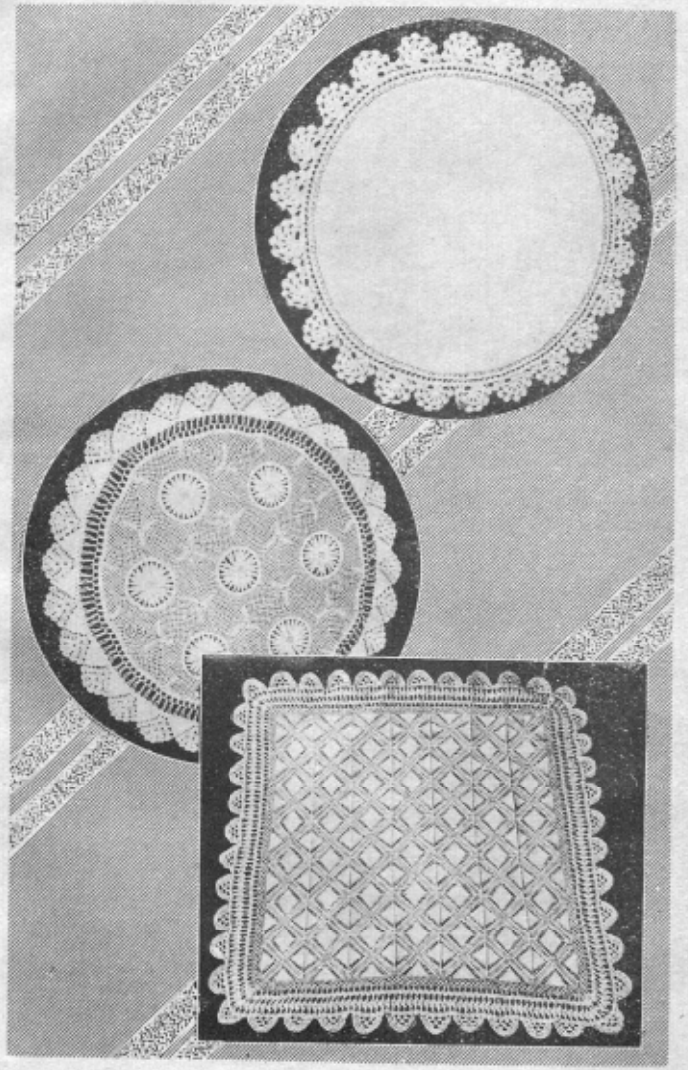
東京都千代田區
昭和
文部省圖書館
3421

各種新型編物



大妻女學校製品

各種新型編物



大妻女學校製品

新型編物と手藝目次

圖入說明

第一　花びん敷……（一）
第二　網代編ショール……（九）
第三　七寶編肩掛……（一五）
第四　ヘーヤピン編の手提……（一五）
第五　足袋カバー……（二一）
第六　靴下カバー……（二六）
第七　赤ちやんの足袋……（三〇）
第八　マクラメ編の基礎……（三一）
第九　羽織の紐（其一）……（四八）

各種新型編物

上と右は流行スタイル下左編物圖解上から、長編み
長編にて目をへらす時は、棒針の止め方

第一〇　羽織の紐（其二）……（五〇）
第一一　羽織の紐（其三）……（五二）
第一二　時計の紐……（五四）
第一三　腕時計の紐……（五五）
第一四　帶締め（其一）……（五九）
第一五　帶締め（其二）……（六一）
第一六　帶締め（其三）……（六四）
第一七　ネクタイ（結ぶもの）……（六九）
第一八　ネクタイ（蝶形）……（七三）
第一九　栞（其一）……（七七）
第二〇　卷煙草入（敷島形）……（八一）

第二一　手提……（八八）
第二二　ランプカバー（其一）……（九二）
第二三　ランプカバー（其二）……（九六）
第二四　ベビーの帽子……（九七）
第二五　子供帽子（二三歲用）……（九九）
第二六　子供帽子（大黑帽）……（一〇一）
第二七　袖無スエーター……（一〇三）
第二八　子供ジヤケツ……（一〇六）
第二九　子供の長靴下（一二歲用）……（一一四）
第三〇　男子用靴下……（一一六）
第三一　袋物のこさへ方……（一二〇）

第三二　名刺入……（一三六）
第三三　君が代銀貨入（二つ折）……（一三六）
第三四　紐飾の結び方……（一四七）
第三五　進物の拵へ方……（一五三）

圖說明入　新型編物と手藝目次（終）

圖說明入

新型編物と手藝

大妻コタカ著

編物を編む針には鈎針と、先が細くなつて居ります棒の針との二種があります。鈎針で編む編み方の一番基となる編み方はクサリ編、長編、短編（コマ編ともいふ）との三種ありますが、この三種の編み方はどんな子供でも編棒を持つ事の出來る人は大抵知つて居る編み方でありますから省略致しまして、實地に就いて申述べませう。

第一　花びん敷

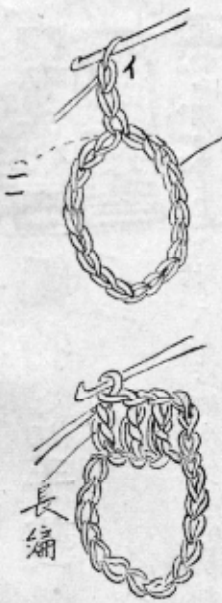
この花びん敷は、出來上り圖にもある樣に眞四角な形で斜かひの、すかしが菱形の模樣のやうに出てゐます。こゝに示しましたのは、五寸四方位の小さいもので、これを大きく編みますと、卓子掛にもなります、編み方は長編とクサリ編の應用でありま

す。

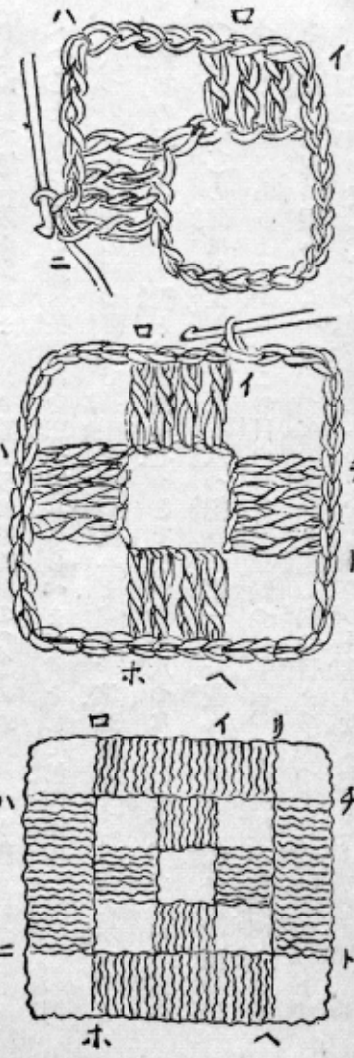
一、レース絲二個（配合のよい色を一ケ宛）　一、レース針（鐵製の鈎針）一本

全部を白で編んで置きますと洗濯しても變らなくてよいと思ひますが、小さい花びん敷などで早く汚れる心配のないものは中だけ白にして飾りは配合のよい別の色をつける方が美しく見えます。

編み方は先づクサリ編を十六編み、これを輪にして第一圖の（イ）の樣に、クサリ編を三つ編みます。それから三つのクサリ編みの根本の直ぐとなりの（1）のクサリから一つのクサリに一つづつ長編みを三つ編みならべます。この長編の高さは、先きに編んだ三つのクサリ編みと同じ高さにいたします。こうしますと、



第一圖　第二圖



第三圖　第四圖　第五圖

丁度第二圖のやうになつて、長編み三つと（イ）のクサリ編みとを合せて、四つの長い目がならびます。次に絲を其ままつゞけて第三圖の樣に（ロ）から（ハ）までの間にクサリ編みを八つして、今度は前の長編みのとなりの目から、長編みを四つならべて編みますと（ハ）（ニ）の樣になります、それから又クサリを八つ編んで長編みを四つあみます

と、第四圖の(ニ)(ホ)の間のクサリと、(ホ)(ヘ)の長編みが出來ます、それから又同じ樣に(ヘ)(ト)の間にクサリを八つして、(ト)(チ)の間に長編みを四つ編みます(チ)のところからクサリを、八つ編みますと(イ)のところに戻つて來ますから、最初に編んだ三つのクサリ編の頭のところで。絲をひきぬきにしてとめ、その絲を切らずに置きます是で第一段が出來ました。第二段は第四圖の(イ)の頭にクサリ編を三つこしらへ(ロ)までの長編の頭へ長編みを三つ編みならべます、そして第四圖の(ロ)(ハ)の間の八つのクサリ編の四つ目まで長編を四つ編みますと、第五圖の(イ)(ロ)に示すやうに最初の三つのクサリ編と、長編み七つとで長い目が八つならびます、つぎに五圖の(ロ)から(ハ)の間は矢張りクサリを八つ編み、第一段で編んだクサリ編みが、四つ殘つてゐる筈でありますから、この目のに長編を四つならべ、下の長編みの頭の上にもその通りに四つ編みならべて、つぎのクサリ編の四つ目までずつと長編みを續けますと、第五圖の(ハ)(ニ)の間が出來るので、この間の長編の數は十二になります。

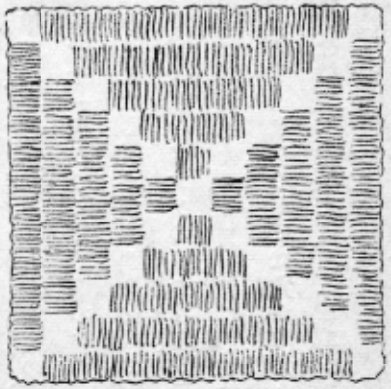
こん度は、またクサリ編を八つして(ニ)(ホ)が出來、長編を十二續けますと第五圖

(ホ)(ヘ)の間の長編十二が出來(ヘ)(ト)の間にクサリ編を八つして(ト)(チ)の間に十二の長編をならべます。それから(チ)(リ)の間もクサリ編みを八つして(リ)から(イ)の間は長編四つしますと、第二段の編み初めのクサリ編に戻つて來ますから、三つ編んだクサリの頭で絲を一旦引きぬいて留めますと、第五圖のやうに二段目が出來上ります。

第三段は編み初めのクサリ編の頭にクサリを三つ編み、すぐとなりの長編の目から長編を十一編みつゞけ、下のクサリの中央(四つ目)即ち第五圖(ロ)(ハ)中央の角まで來ましたら、またクサリを八つ編み下のクサリの五つ目から、下の長編みの頭を通つて、次ぎのクサリの四つ目迄、二十の長編みを列べます。

それからまたクサリを八つして、前と同樣に二十の長編をいたします、かうして四角でクサリを八つしては角から角まで長編を二十して(チ)(リ)の角から(イ)まで八つ長編をして、編みはじめのところに戻りましたら、前のやうに絲を引きぬいて留めます。

第六圖

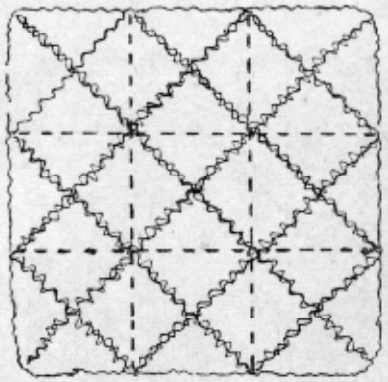


第四段ははじめにクサリを三つ編んで、すぐとなりの目から十五の長編をならべ、クサリを八つして下のクサリの中程から三段目の長編の頭の上を通つて、つぎのクサリの中程四つ目まで長編を二十八ならべます。

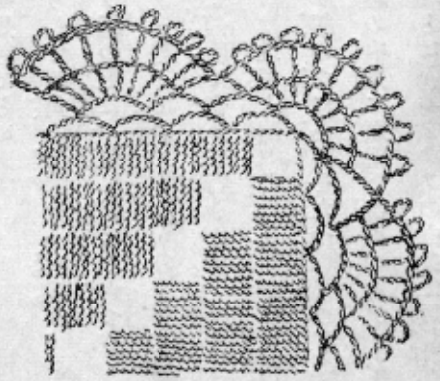
それからまたクサリを八つして長編みを二十八ならべるといふやうにしてぐるりと一回いたしますと編みはじめに返つて來ます。

第五段の編み方は前と同じで、はじめにクサリを三つ編んで長編みを十九ならべ、クサリを八つして長編みを三十六ならべます。これを一回繰返して編みはじめのところにかへつて、絲を引ぬき、留めて切りますと第六圖の樣に眞四角の中に小さな角形のすかしが斜にならんだものが一枚出來上ります。この四角は、一寸七八分位の四角でありますからこれを九枚だけ、別々に編んで置きます、目はなるべく堅く引締めて

第七圖



第八圖



長編みの頭をすくふ時には向ふ側だけすくひ、手前をすくはない樣にした方が宜しいのであります。

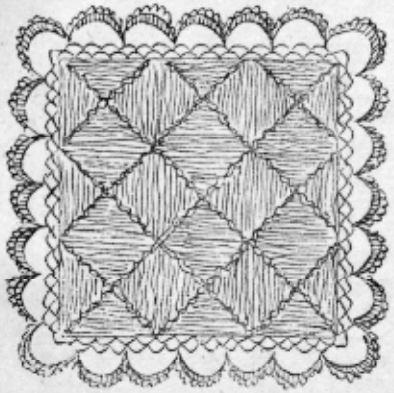
第六圖にある樣な小さい四角が、九枚出來ましたら表と表を中に合せて、角のサリのところから共色の絲で引ぬきにして、一目づゝ接ぎ合せて行きます。この時長編

の頭で外側の目を一つだけすくひます。こうして三枚を一列に接ぎ、この三枚づゝ接ぎ合せたものを第七圖のやうに接ぎ合せます。これもやはり中表に合せて、裏の方から目をひろつて行きます。

今度は地色の絲と配合のよい別の色絲にかへて、飾り編みを致します。先づ角のところから、クサリ編を六つして、四つ目のところへ短編でとめます。

第九圖

出來上り



かうして四角の周圍を一回編み、そのクサリ編の上に、前と同じく六つづゝのクサリを編んでは、となりのクサリ編の中央に短編で留めて行きます。

次には地色と同じ絲にとりかへて角のクサリ編の中に長編を九つしてつぎのクサリ編の中央に短編で留め、クサリを六つしてとなりのクサリの中央に短編で留

めます。かうして長編九つしてはつぎのクサリにとめ、クサリ六つしてはつぎのクサリにとめると云ふ順に周圍を一回編みます。

それから又二回編んだクサリ編の絲と同じ色にかへて、先きに九つした長編の上に長編を九つ編みます、この時、下の長編の頭をすくつて一つ長編を編み、クサリを三つ編んで、このクサリを今編んだ長編の頭へ短編で留めて置きます。かうして頭に飾りのついた長編を九つしては、つぎのクサリ編の中央に留めクサリ六つして第八圖の樣にまたつぎのクサリ編に留めます、この編み方を一回いたしますと花びん敷が出來上ります。

第二　網代編シヨール

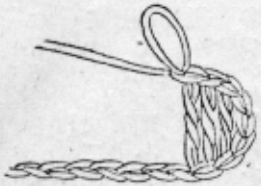
一、毛色　色は隨意で十オンス　太さは　地薄を好む人は中細

一、毛絲編鈎針、(角製)　一本

丈は其の人の隨意に致します。幅も勿論任意でよいのでありますが、普通幅は凡一

第一圖

第二圖



第三圖

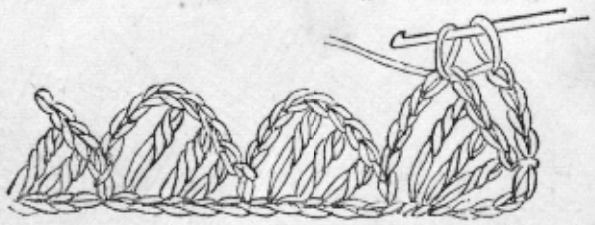
第四圖

尺位鎖編を編んで、その數が四で割り切れる數にしてこれを幅と定めます。そして一方の端から幅を行つたり戻つたりして、編むのであります。ここには說明の都合上鎖編百二十と致します。

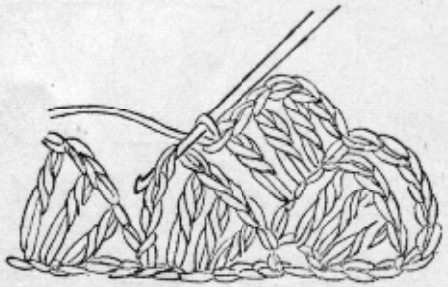
先づ鎖編を百二十編んでこれを幅と定めます。次に第一圖の如く鎖編を三つ編み、それから幅の端、即ち百二十の鎖編の最後の目に長編を三つ編み第二圖の如くし、それより四つ目の鎖編の中に短編を一つ編みます。第三圖を御覽下さい。

これで網代編が一つ出來上りました、この次は同じ事をくりかへすのでありますが、(第

第五圖



第六圖

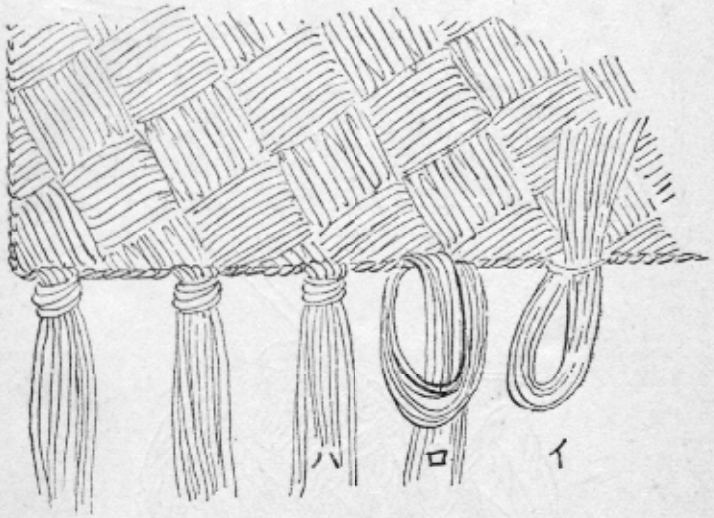


四圖)今一度申しますと、鎖編三つ編んで短編と同じ穴に長編を三つ編みます、そして又四つ目の鎖編に短編を一つ編みます、これで網代編が一つ出來ました。

網代編一つこしらへるには鎖編三短編と同じ穴に長編四、四つ目の鎖編に短編一、これだけ編めばよいのであります。

こうして編んで參りますと、最初の百二十の鎖編の上に、三十の網代編が第一段として出來上るのであります。

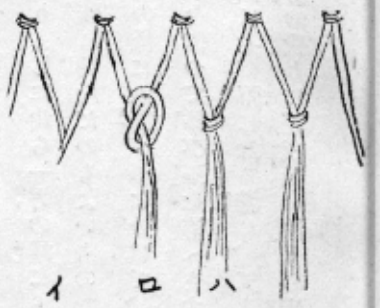
第七圖



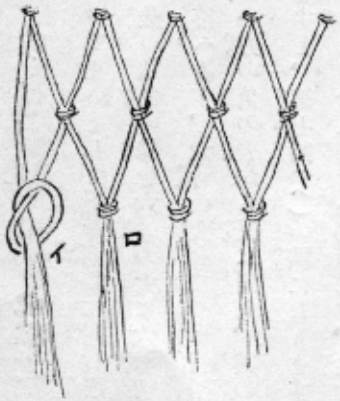
二段目は、一段目の裏を見ながら編みますから、先づ裏返して一段を編んだ絲を續けて鎖編を三つ編みます。

次に一段目の三つの鎖編の中に短編一つと長編三つとを入れますが、其の短編一つと長編三つとの間は鎖編を三つ致します。くり返して申しますと、一段目の網代編の鎖編三つの中に短編を一つして鎖編三つしてそれに長編を三つ入れます。之れで二段目の網代編が一つ出來上りました。このやうにして、鎖編三つ短編の穴に長編三つ、一段目の次の鎖三つの中に短編一つを編

第八圖



第九圖



みますと、二段目の網代編が又一つ出來上ります。こうして二段目を端まで行つたり戻つたりして好みの長さに編むのでありますが、別の色で筋を入れますには、丈を五寸程編んで絲の色を取り替へて一寸編みます、二筋に致しますには、地色で一寸編んで又色を替へて一寸編みます。こうして元の地色で二尺程編みます。この長さは掛けて見て定めて戴きたいのでありますが、少し短い位に編んで置きましても、掛けてゐます中に延びますから新らしいうちに丁度よい長さでは後に見苦しくなります。とにかく好みの丈に編んで一筋又は二筋の飾りを一方の端と同じに編みます

そして五寸程地色で編んで兩端の筋の丈や、其端の丈が同一の長さになりましたらば切つて止めまして房を兩端に附けます。

先づ地色の絲を六寸の丈に六本切りまして之れをまとめて、一筋としたものを十八筋拵へます、六寸の丈を二つに折つて三寸とし、其の輪を第七圖(イ)の樣に肩掛の幅の一方の角の表から裏に通し、其の輪の中に第七圖(ロ)の樣に三寸の先端を通して締ますと、第七圖(ハ)の樣になります、この樣にして兩角に通します、そして幅を十七等分して十八筋を全部通して、丈をそろへて切つて置きます。之れで一方の房は出來上りましたから一方の端にも同じ樣に拵へます。房の長さを最初八寸位に切りまして七寶に結んだのもよいものであります、其の結び方は第七圖の樣に通したものを第八圖の樣に六筋づつに分けて、輪から五分位の所で隣の六筋が輪の中に入る樣にして、輪を作つて結び玉を拵へます。こうして、全部を一度づつ結びましたらば、第九圖の樣に七寶形になる樣に、又も六筋づつ隣と結び合せますと賑やかな房が出來ます。又房の代りに花瓶敷の飾りの樣な編方を致しても面白いものであります。

第三　七寶編肩掛

最初必要な幅だけの長さに鎖編を致します。數は五分出來る樣に、例へば五十とか五十五とか云ふ樣に作ります。それから針に掛つた目を五分位に延ばして大きい鎖編を一つし、その鎖の一本の絲に針を通して短編をして又五分位に延ばし、鎖をして前の樣に一本の絲に針を入れて短編をし、それを五つ目の鎖に短編で留めますと一つ出來ます。かうして次々と繰返して終りまで編みましたら、裏返して又針に掛つて居る目を延ばして、第一段の樣に編んで二つ續いて居る眞中(高い處)に短編みで止めて行きますと、七寶の形に編めますから所要の長さにあみ、最後の段は鎖五つしては高い處に短編で止めて行きます。飾はあつさりと房を付けるとよろしいでせう。

第四　ヘーヤピン編の手提

ヘーヤピン　一箇。　角製鈎針　一本。

人絹テープ（スピン）二把（例へばローズ一把黑二把又は同色）
紐　二本。　紐通し輪　十個（直徑三分位）
ビーズ房　一個。　裏用布　少々（薄絹又は綿モス）

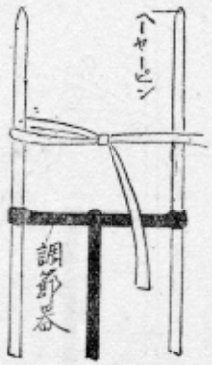
最初に御注意致しますがテープは捩らないやうにして頂きます。

先づ初めに角製の鈎針で普通の鎖編みの初めのやうに一つの輪を作り、（第一圖）其の一方の端を二寸五分位ひ殘します。輪の長さはヘーヤピンの半分位ひに致します、そしてピンの（ロ）の針にはめ（二圖）長い方の絲を（イ）の前から後に廻し拇指で中央を押へながら（三圖）鈎針で（ロ）の針にある輪の下の方から上に出し、絲を抄つて中央で（四圖）短編を致します（五圖）

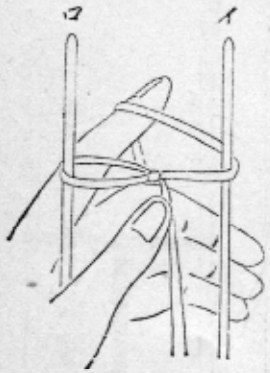
次ぎに鈎針をその（イ）の後の方に廻し（六圖）即ち鈎の方が手前に向くやうな形になります。絲が捩れぬやうに注意しながら、そのままピンを左から右へ廻しますと（ロ）は右、（イ）は左になります、又左側の即ち（イ）の輪の下から上に針を出し（七圖）絲を抄つて短編をします（八圖）すると圖のやうに（ロ）は輪が二つ出來（イ）は輪が一つ出來

第一圖

第二圖



第三圖



ます。

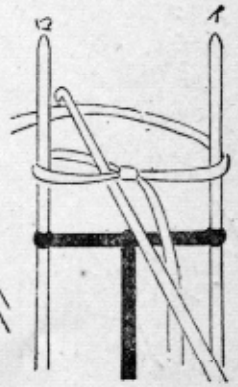
以下同じやうに繰り返しながら、兩方の輪を四十づつ編みます、四十を編む間に調節器の上に一ぱいに編みましたら、器をはづして絲を下に送り又器をはめて編みます。そして終りに絲を二寸五分殘して切ります。

中段は、一段と同じ方法で兩方の針に目數が六十宛になる樣に編みます。

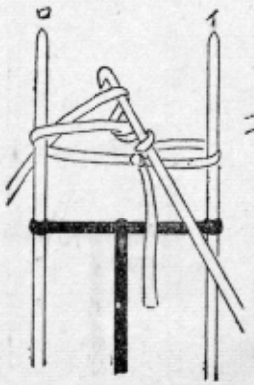
三段目即ち上の段も、中段と同樣に兩方の輪が六十になる樣に編みます。

是れで三段共編めましたから、今度は下の段即ちわさ四十の分と、六十のわさの分とを組み合せます。

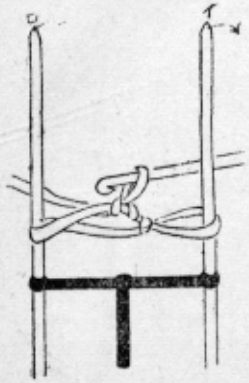
第四圖



第五圖



第六圖

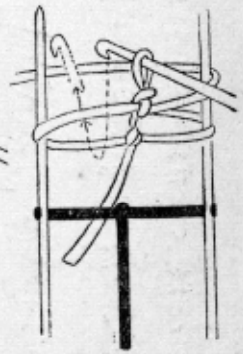


以上出來ましたらば、六十の目のものを二本とりまして平におき、兩鈎針で組み合せて行くのでありますが、それには練習しなくてはなりませんから、只今は便宜上で組み合せて參ります、（第九圖A）先づ六十の目の二本を平な處に置きまして右の一番下の輪を右手に持ち、左の一番下の輪を左手に持ち（第九圖B）右の輪を左の輪の下から上に出し、右手で押へます。

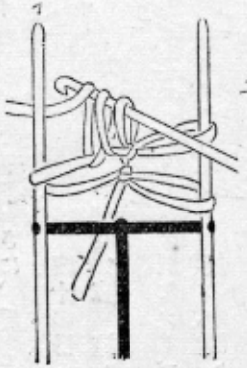
次ぎに、左の二番目の輪を左手に持ち、右の輪の下から上に出します。

そして左手に持ち、二番目の輪を左の輪の下から上に出して以下同じやうに合せて參ります（其時輪は捩れないやうに注意して）

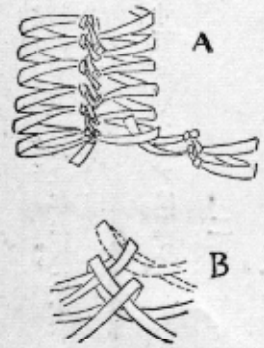
第七圖



第八圖



第九圖

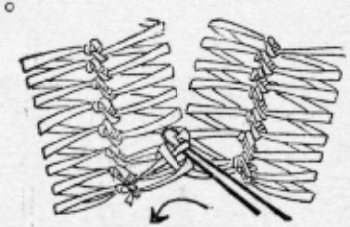


次ぎに、四十の目のものと、合せるのでありますが、前のは同數でありますから一つづつ組み合せれば宜しいのでありますが、是れは六十の目と四十の目とを合せるのでありますから、六十の目の方一つと四十の目の方一つ六十の目の方二つと四十の目の方一つ、といつたやうに、六十の目の方は一度は一目、一度は二目、四十の目の方は、いつも一目づつにして合せますと恰度都合好く終りが同時になります。

六十の目、二つに四十の目一つを組み終りましたら、四十の目は底になります。それから横をかがり付けます。それは、短編みのところは同じ色の絹絲で普通の縫針で、裏になる方から編み始めと

編み終りとを、目立たぬ樣にかがり付けます、そして二寸五分程殘してあるテープの編み始めの分は、短編みをかがり付ける時に一緒にかがり付けて切ります。編み終りの二寸五分のテープは編み終りの最後のわさに通しましたら、編み始めの最初のわさ二本一緒に第十圖のやうにくぐらせて元の處即ち編み始めのわさに、戻して短編の處で絹絲でかがり切けて切ります。

第十圖



四十の目の方が、袋の下部になりますから、わさの下の方へ同じ色の絲を通して固く裏で結んで置きます。上部はわさの上を別なテープで一つづつ短編みをして一週致します。

袋の内側へは小布を表の袋と同じ寸法より、少しゆつくりに縫ひます、そう致しますと表とシツクリして肌分れになりません。

底は普通の袋に縫つて底の絲を引きしめて、表と裏とを底で縫針で留めます。そして前の南京玉を表に付け、裏でよく留めて置きます。

上の方は短編みの處で、布の端を少しまげ、細かくまつり新けにします。紐通しの輪が十個ありますから適宜のところに付けて、それに兩方から紐を通します。

是れで、すつかり出來上りました。スピンは二把共、同じ色でも又中を一段變り色にしても宜敷いのであります。

第五　足袋カバー

器具、毛絲用　鈎針　一本。

材料、スコッチ又は毛絲凡そ三オンス。

編方はすべて短編に致します。初め拇指を拵へますに第一圖のやうに、二重の輪を作りまして、その輪に短編を八つ致しまして、輪の端の絲を引きしめます。（第二圖）

二段目は、一段目の一つの目に二つづつ一廻り編みますと、全部で十六の目になります。（第三圖）

第一圖

二重の輪

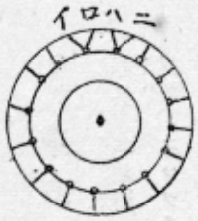
第二圖

一段
目數八つ

第三圖

二段
目數十六

第四圖



三段
目數十八

第五圖

四段
目數二十

三段目は、一つ目に一つづつ編みます。そして十段目までは増なしに十六をぐるぐると編みますそれで拇指が出來ましたから絲を一寸程殘して切ります。

次に同じ方法で四本の指の這入る先きを編みます。先づ拇指と同じ數で同じ様に一段目と二段目を編み、(第一、二、三圖まで)

三段目は外側になる方、つまり小指になる方で目を二つ殖します。其の編み方は先づ一つの目に一つ編み、(之れを説明の都合で(イ)と致します、その同じ目にもう一つ編み、之を(ロ)と致します次ぎの目にも二つ編んで(ハ)(ニ)と致します、是れで目が二つ増したのであります)其他の目には

一つづつ編んで一廻り致しますと合計十八の目になります。(第四圖)

四段目は三段目の(イ)の目には一つ編み(ロ)と(ハ)との目には二つづゝ編んで是れを(イ)(ロ)(ハ)(ニ)と致しますと、ここで二つ増したのであります、次ぎの目からは一つの目に一つづつ編んで一廻りいたしますと合計二十の目になります。(第五圖)

五段目は、四段と同様に(ロ)(ハ)の目には二つづつ(イ)(ニ)と其他の目には一つづつ編んで一廻り致しますと目數は二つ増して二十二になります。

六段目は、五段目と同じに編みますと全部の目數が二十四になります。

七段目より九段目までも五段目と同様に編みますと目數が三十になりますから、十段目は増減なしに一つの目に一つづつ編みます。以上で四本一緒の指が出來上ります。

先きに編んである拇指の最後の目を編棒に一緒にして拇指と四本指とを連續させて拇指の殘り絲一寸位を編み込みながら拇指の廻りを一廻り編んで、其の絲を續けて、四本指の廻りを一廻り編みますと、全く指が續いて、足袋の先きと同じ形になりますから、そのままぐるぐると足の文數の三分の二位まで同じ目數で編みます。

次ぎに踵を編みます、先づ全部の目數四十六を二等分して、二十三を甲とし二十三を踵と定めて一度平な處に置いてみまして目印をして、置きます、それから編み絲を續けて、甲の方は編まないで踵だけを行つたり戻つたりして、幾度も編みます。此所までぐるぐると編んで廻りましたから、表と裏とがはつきりとして居りますが、踵は一段は表から、一段は裏から、いつも普通の短編を致します。

底の圖

ますから、どちらから見ても、くしやくしやとした物になります。これをゴム編と申します。ゴム編みで踵を拵へるには、行く時には端より一つ手前で止めます。止めたらすぐに裏返して戻ります、戻る時にはいつも鎖編みを一つして戻ります。詳しく申しますと踵の部分の二十三の目を表側を見ながら、一筋編みまして、今度は裏を向けて、一つ鎖編みをして、そして裏側を見ながら、短編みをします、端より一つ手前まで編みましたら又表を向けて、鎖編みを一つして端より一つ手前まで編み、又裏を向けて鎖編み一つして端より一つ手前まで編みます。

斯うして一段編む毎に目數は一つ少なくなります。それを繰り返して足に合ふ長さまで編むのであります。これで足の底は出來ましたから、踵の後側を編みます。

今度は踵の三方の周圍の目を拾ひながら一段編み、二段目から兩端で二つづつ目を減じて、九段目まで表裏と返してはゴム編みを致しますと、踵の後側が出來ます。

次ぎに今編んだ周圍の目を拾ひながら端まで編んで參りましたら、今度は甲の分の目を一つ拾つて編み、それから裏へ返して、二つ目を飛んで戻つて來ます、この時は踵の後を通つて一方の甲の端まで編みます。そしてここでも甲の目を一つ編みまして裏返します。こうしてゴム編みをするのです。いつも裏返したらば、二つ飛んで編んで戻ります。そして甲の處へ來たならば、甲を一つ編みますから甲の目は一段毎に踵に連續されます。それを五六段編みましたら踵と甲の分との境ひが角になつて居りますから、其所へ三角を入れるのであります。

甲の部の圖

先づ角へ短編みを一つ編み、裏返して二段目は一段の上と甲と後側とへ一つゞつ編

みますと都合三つになります、次ぎは表に返して、二段目の上三つと甲と後とを一つ合計五つ編みます、こう致しますと、角が目立たなくなります。

つまり、角の處を三段編みますと、角の處へ三角が這入ります。その三段目をずつと續けて、表側を見ながら、甲の方向へ編んで參りまして、甲の分目を全部拾ひながら編みます。すると甲の一方の端に今一つ三角があります。そこへも又三角を編み入れます。それは甲の目全部拾つて編んで參りましたまま引き續いて、角へ一つ編み、二段目に三つ、三段目に五つ編みます。その三角の處の最後の目から引き續いてずつと踵の方向へ編みまして、グルグルと連續して三週致します。そして留めるのであります、是れで出來上ります。足の甲高の方は拇指と四本指との分を連續させてぐるぐる編み初めてから二段目あたりで甲の部分で一つづつ二ケ所程目を殖しますと宜敷いのであります。

第六　靴下カバー

お寒くなりますと概して、上氣して足が冷えて困ります、殊に學生は足袋より薄い靴下ですから足が冷えまして、衞生上好くない様に思はれます、それで靴下を二枚はいてゐられる方もあります様ですが、指先が冷えるのですから靴下カバーをおはきになると好いと存じます、そして學校では其のままスリッパを、おはきになるなり上靴をおはきになるなり、なされば、大變に足の指先きが暖かであります。お足が暖かですと着物の一枚は違ひます、薄着なさいましても結構たへられますから身輕く運動なさる事が出來て發育上大變よろしい様に存じます。

又一般大人の方でも御活動にイヂケないで活潑に御働きになれる事と存じまして、あまりむづかしくなくて僅かな時間で、編めますので其の編み方を申上げて見ようと存じます。

編み方も用具も足袋カバーと同様であります。

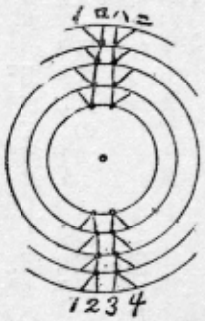
一段目も二段も足袋カバーと同様に致します。(第一圖)(第二圖)(第三圖)

三段目は、第一圖の様に兩方で目を二つづつ都合四つ殖します。其の編み方は、二

段目全部で目が十六ありますから、先づ一つの目に一つ編み是れを矢張り(イ)と致しましてその同じ目にもう一つ編み、それを(ロ)と致します。

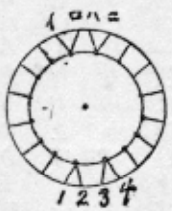
次ぎの目にも二つ編んで(ハ)(ニ)と致します。是れで一方に目が二つ増したのであります。そして次ぎの目からは一つの目に一つづつ六つ編みまして、七つ目は又目一つに二つ編みそれを(1)(2)と致しまして其の次ぎの目にも二つ編みまして(3)(4)と致します。そして其の次ぎの目からは一つの目に一つづつ六つ編みますと、三段の目が合計二十の目になります。

第一圖



三段
目數二十

第二圖



四段以上

四段目は、三段目の(イ)の目には一つ編み(ロ)と(ハ)との目には二つづつ編んで是れを又(イ)(ロ)(ハ)(ニ)と致します。

此處で目が二つ又増したのであります。次ぎの目からは一つの目に一つづつ編みまして又、かた一方の(1)の處へ參りましたら(1)の目には一つ編みまして(2)と(3)との目では二つづつ編みまして是れも矢張り、(1)(2)(3)(4)と致します、此處で又目が二つ殖えます。次ぎの目からは一つの目に一つづつ八つ編みます、と四段目を編み終り合計二十四の目になります。

五段目は、四段と同様に(ロ)(ハ)と(2)(3)との目には二つ宛(イ)(ニ)と(1)(4)　其の他の目には全部一つづつ編みますと二十八の目になります。(第二圖)を御覽下さい。

六段目は、五段と同じに編みますと、全部の目數が三十二の目になります。

七段目より、九段目迄も五段目と同様に編みますと、目數が四十四の目になりますから、十段目は、増減なしに一つの目に一つづつ編みます。

是れで五本の指先きが出來上りました。(イ)(ロ)(ハ)(ニ)、の(1)(2)(3)(4)目數を増した所を兩横にして、平に置き一度形を整へてから足先きを入れて見て頂きます。そして肥つた方や、甲高の方は、甲の方で幾つでも隨意に目數を増してそれから足底の長さの三分の二位ゐまで、グルグル連續して編みます。

踵の造り方は、足袋カバーと同樣に編めば好いのでありますから、ここには略します。

第七　赤ちやんの足袋

材料、色毛絲一オンス。外に白毛絲少々。

之は一二歳用の足袋で、編方はやはり短編に致します。初め色絲を取つて鈎針で鎖を三十五編みます、それを最初の目に針を入れて輪に致しまして、（大きさは此鎖でどうにでもなります）鯨尺で一寸八分程短編を致します。（笹編の出來る方は笹編でもよろし）此時にはだんだんと幾分か細氣味に編みます。（目立たぬ處で目を飛ばし）と足首の所が格好よくなります。

次に絲を續けて足の甲の部としてゴムあみを一寸三分位致します。仕方は短編を十位しまして一つ鎖をし裏返して短編が、十目まで來ましたらば又一つ鎖をして引返すのであります。（此部は疊編でもよろし）此時も先の方を少し細くする爲めに目を程よ

く減します。次に短編の部とゴム編の部とを一所に短編で廻つて一寸程編みます。此時にも目立たぬ所で目を飛ばして行きますと、自然に足の裏が出來ますから其處が一寸七分位になりましたら形を整へて眞直ぐの處で止めます（踵が爪先の所で止める事）そして裏返して眞二つに折つて手前と向ふ側の目の絲を一本づつ抄つてかがり、堅く止めて絲を切ります。次に白毛絲で短編一つして鎖二つし、次の目に短編で止めて、又二つ鎖して隣に止めて行くと緣飾りがあつさりと出來ます。次は絲を二本にして長さ一尺一寸程鎖編をして紐を作り、足首の所に通します。そして紐の先には玉を付けます。仕方は絲を三十回位指先にまき、その眞中を紐の先の殘り絲で堅く結びきれいに丸く切り落すのであります。

第八　マクラメ編の基礎

近頃新らしい手藝が、いろ〳〵と研究されて來ました。マクラメ編等も其の一であります。一體マクラメ編と申しますのは、昔アラビヤ人が、布地の横絲をぬき取りま

妻大圖

して、縦糸を色々に工夫して編み初めたのが、漸次發達して、今日のやうなものが出來上つたのであります。其れでありますから、其の應用の範圍もなか〳〵廣いのであります。即ち實用品とし、又は裝飾品として、なか〳〵盛んに用ひられてゐます。其の應用された大きいものには、カーテン、テーブル掛、クッション、鏡掛等もありますし、また電燈カバー、子供のマントの縁、帽子、ネクタイ、バンド、ショール、手提羽織紐、時計紐、帶止め、栞、等に應用いたしますと、なか〳〵面白いものが出來ます、又其れに用ひます材料も、毛絲、リリーヤーン、絹レース等何れでも用ひられます。しかし初めて、マクラメ編をなさる方には、光澤もあり、適當の太さを以てゐるリリーヤーンが、最も出來榮えが宜しいやうであります。

マクラメ編みの用具。

小さい簡單なものを作りますには、特別な用具は必要ありませんが、少し大きい、手のこんだものを作らうとしますには、矢張り用具の適當なものが必要であります。

一、烙鏝臺（これは、マクラメレースをいたします時に、糸をピンで留める臺であります。

二、ボビン（これは糸巻きで、小さいものや、短かい編み絲のものゝときは、必要ありませんが、大きいものや、長いものゝときには、是非必要であります。）

三、ピン（これは編みました部分、部分を留めるのでありますから、其數も澤山必要であります。）

基礎の編み方

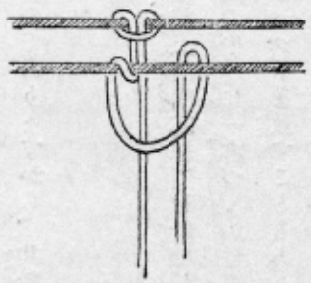
（一）絲の掛け方、先づ烙鏝臺に一本又は二本の横絲（所謂芯絲）を針でしつかりと留めます。そして其れに縦絲（即ち編む絲）を一圖のやうに一本づゝかけて行きます手提袋等を作ります時は、後に説明いたします。ピコットを致すこともありますが、マクラメの編み初めは、多くの場合は、かやうにいたします。

即ち、芯絲を烙鏝臺にとめましたら、編む絲を二つに折つて輪にします。そして、芯絲の下から輪をくゞらして其の輪に二本の絲をくゞらして絲をしめます。一圖のやうに。二圖は掛け絲をしめたものであります。

二、フラントナッツ、矢張り芯絲を一本かけて、其れに編まふとする絲をかけます。そして其の下に叉横絲を張つて、かけ絲の一本を、芯絲の下にくゞらし下から芯絲の上に持つていつて右から芯絲の下にくゞらして今度は右から芯絲の上に持つて行つて

第一圖

第二圖

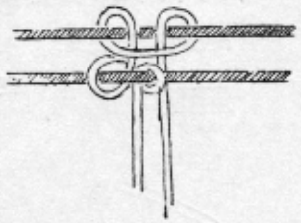


第三圖

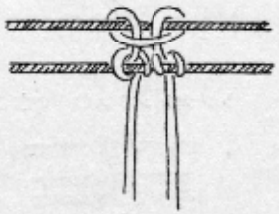
上から芯絲の下に出して、結び絲の上に引き出します。三圖のやうに。このやうに一本、一本にフラントナッツをいたすのであります。フラントナッツは右のやうに芯絲

を別にかけないで、結び絲の一本を芯絲として、フラントナッツをしても、よろしいのであります。第三圖の絲をしめますと第四圖のやうになります。

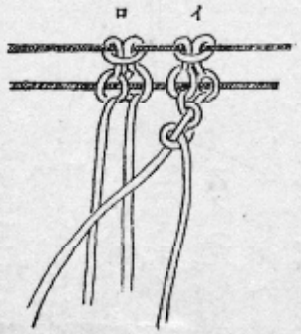
四、スラントナッツ（右からのもの）



第四圖



第五圖



第六圖

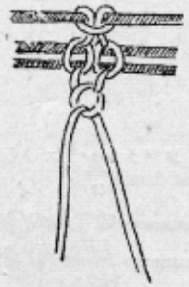
スラントナッツは、右からのものと、左からのものとあります。先づ右からのものから説明致します。

掛絲をかけて、フラントナッツを致します。そして、右端の結び絲の一本を取つて

芯絲として、他の結び絲の上に、斜に持つていきます。そして右端から二番目の絲をとつて、芯絲の上から下にくゞらして、右に引き出して、今度は矢張り其の絲の左から芯絲の上に持つて行つて、結び絲の上に引き出しますと六圖(イ)のやうになり、其れを續けて(ロ)の絲も同じやうに結んでいきます。

第七圖

第八圖



五、スラントナツツ(左からのもの

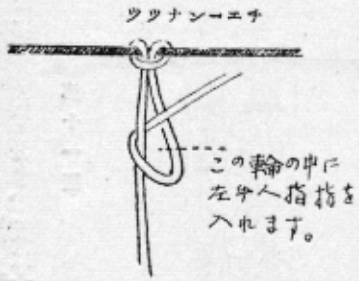
方法は、右からのスラントナツツと少しも變りません。只最初に左端の一本を芯絲として、左端から二本目の編み絲で第七圖のやうに、左端の編み絲の上から下にくゞして左に引いて締めますと、第八圖のやうになります。

六、チエーンナツツ(一重)

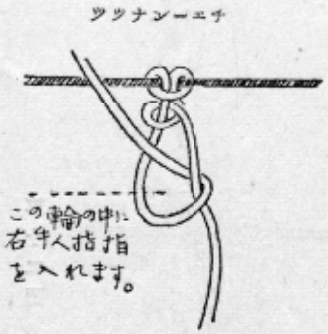
チエーンナツツには、一本でするものと、二本でするものとありますが、結び方は何れも同じであります。

即ち九圖のやうに、左手人指指を輪の中に入れて、右側の結び絲を左側の結び絲に結ぶやうにして右上に引き次には反對に、右手人指指を中に入れて、右側の絲を右側の結び絲に結ぶやうにして、左下に引きますと、第十圖のやうに、一つのチエーンナツツが出來ます。其れを續けますと、十圖(八)のやうになります。

第九圖

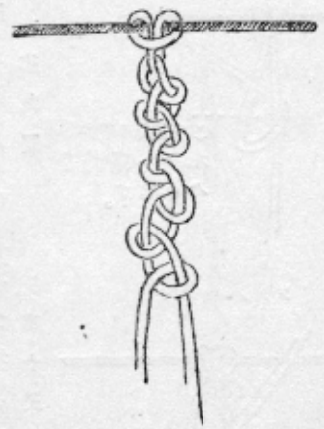


第十圖

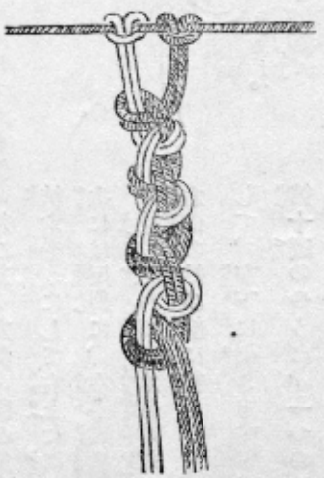


七、チエーンナツツ(二重)

これは先の一重のチェーンナッツと同じであります。只結び絲が圖のやうに二本になる丈でありまして、この結び方は用ひます範圍が大變廣くて、一つの色から他の色に移りますとき、又は大變に變化のある模樣等の場合、このチェーンナッツによつて手際よく細工が出來ます。



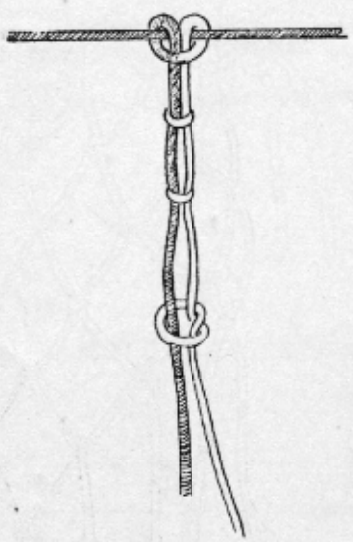
第十一圖　チェーンナッツ



第十二圖　チェーンユチ

八、フレンチナッツ。

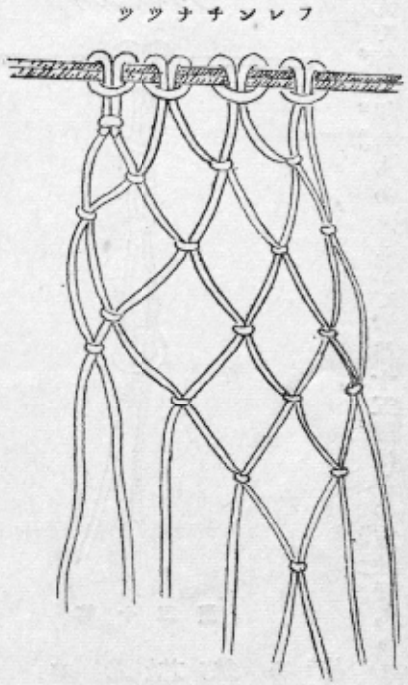
結び絲の右側の一本を取つて、右側の結び絲の上から下に廻して、第十三圖のやうに結びます。第十四圖は、それを續けたものであります。この結び方は電燈カバー等によく用ひられます。



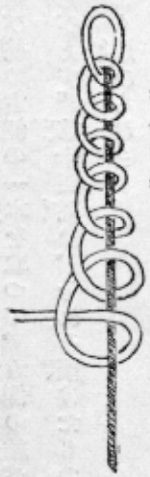
第十三圖　フレンチナッツ

九、ボタンホールナッツ

八圖の如し、一本の芯絲にボタンの穴かゞりのやうに結んで行く仕方でありまして、芯絲を別に入れないで、結び絲を輪にして、輪をピンで留めて置いて、一本を芯にし、他の一本を先のやうにして結んで行く場合もありまして、第十五圖はその方法であります。そしてこのボタンホールナッツを結び目を外側にして、扇形又は帆立貝のやうな形にして手提の口等に應用



第十四圖

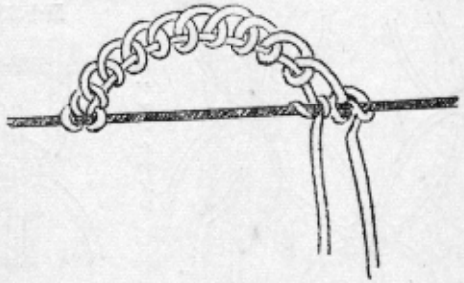


第十五圖

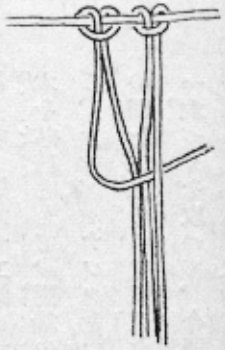
して、紐通しのちにすることもあります。（第十六圖）

十、シングルナッツ

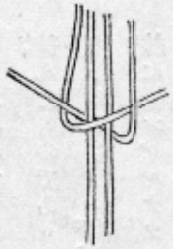
先づかけ絲を二組かけます。そして其のうちの中の二本を芯絲にして、左側の一本を芯絲の上にのせて、右側の一本を芯絲の下から、左側の芯の上に出しますと、第十六圖のやうになります。次に其の引きだした絲を芯



第十六圖



第十七圖 シングルナツツ



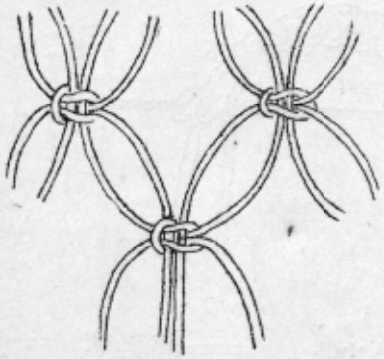
第十八圖

第十九圖

芯の上から右側に持つて行きます。そして右側の絲を第十七圖のやうに、芯絲の下から左側のかけ絲の上に出します。次に第十八圖のやうに、左側に出てゐます。結び絲を芯絲の下から右側に出して、右側に出てゐます結び絲を、芯絲の上から左側の輪の中に通します

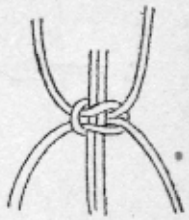
そして其れを引きしめ

第二十一圖



シングルナツツ

第二十圖



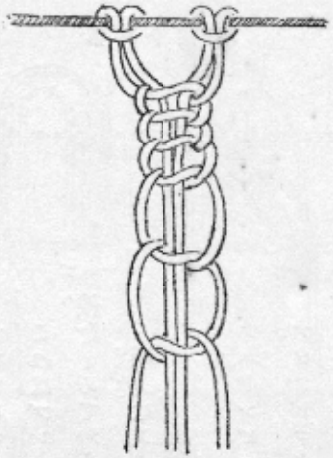
ツツナルグンシ

ますと、第十九圖のやうになります。第二十圖は其れを續けて結んだものであります。

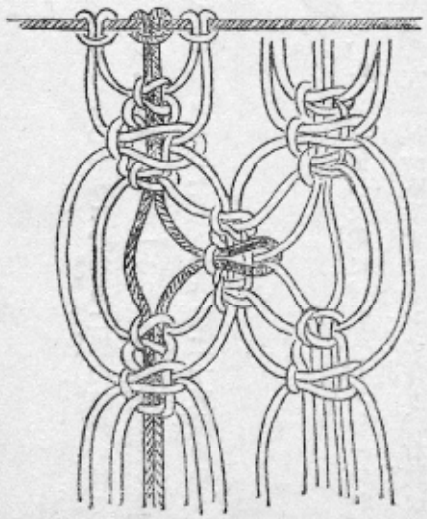
十一、ダブルナツツ。

シングルナツツと同じ結び方を二つ以上重ねて結んだものでありまして、其の形は種々樣々に變化のあるものが出來ます。第二十一圖は、同じ芯絲にシングルナツツを數回續けて結んだものであります。第二十二圖は六本の絲をかけて、中の一本を芯絲として、兩端の掛絲から一本づゝを取つて、シングルナツツを二ついたします。そして其の間を二三分あけて置きまして、今度は左右兩端一本づゝを取つて、今間をあけて置いた、シングルナツツの間の上に今一個のシングルナツツを前

よりも大きく結んで、其れを數個續けますと、圖のやうな形のものが出來ます。



第二十二圖　ダブルナツツ



第二十三圖　ダブルナツツ

十二、ピコット

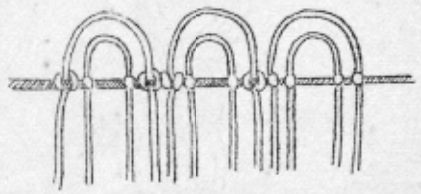
ピコットは、手提の編み初め等によくする方法でありまして、其の結び方は、初め

に編みます絲を半分に折つて、輪にします。そして其の輪をピンでとめて置いてからフラントナツツをいたします。第二十三圖のやうに、これをプレーンピコットと申します。

ナツツピコット

これはプレーンピコットのやうに、初め二組の絲をかけて輪をとめてから、シングルナツツを一つして、横絲に左の端から順次にフラントナツツをいたします。第二十五圖のやうに。

第二十四圖



プレーンピコット

チエーンピコット。

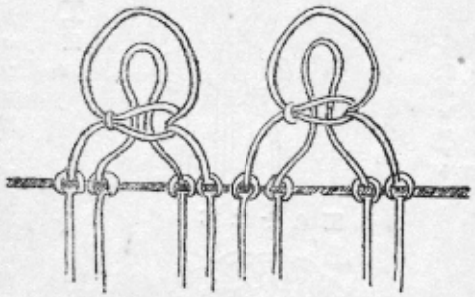
ナツツピコットの、ナツツをした處に、チエーンを一ついたします。絲の數は、左圖は一本でチエーンを作り、右圖は二本でチエーンを作ります。第二十六圖のやうに。ループ狀のピコット。

先づ横絲に二本の結び絲をかけて、シングルナツツを二つします。但し其の二つのシングルナツツの間を三分位あけて、結んでから上につめますと、左右にピコットを形作ります。第二十七圖のやうに、

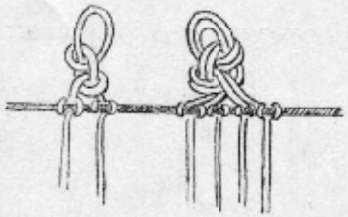
第二十八圖

これもピコットの一種でありまして、横絲に四本をかけて、フラントナツツをいたします。そしてシングルナツツを、一つ或は二つ適宜に結んで、左右兩端の結び絲を圖のやうに結んで再び四本をまとめて、其處にシングルナツツをします。

第二十五圖



ナツツピコット

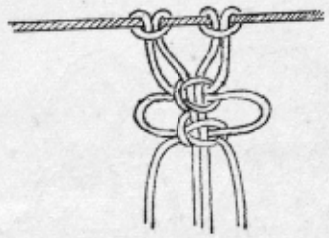


第二十六圖
チエーンピコット

スカロップ

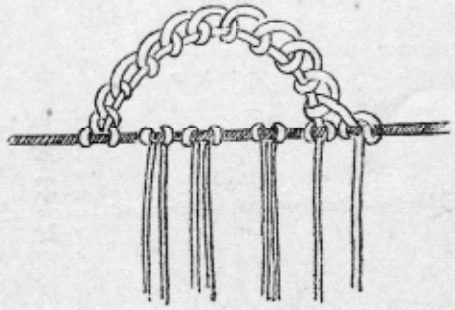
スカロップは、手提其の他の袋物の口に結びまして、紐を通す場合に多く用ひられます。其の方法は、先づ横絲に一本の絲を輪にしてかけます。そして其の中の一本を

第二十七圖

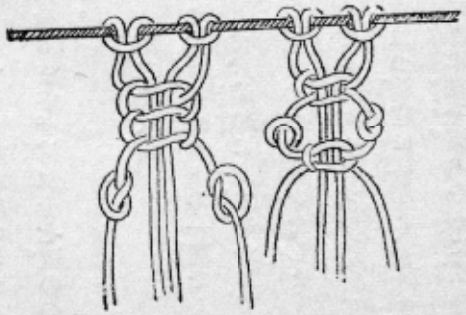


ループ狀のピコット

第二十八圖

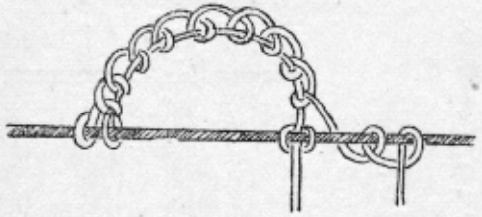


トツコヒの狀ブール

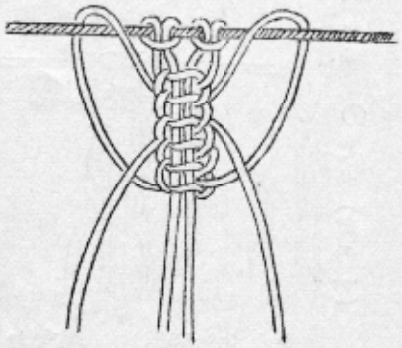


第二十九圖　ブツロカス

第三〇圖　スカロップ



第三十一圖

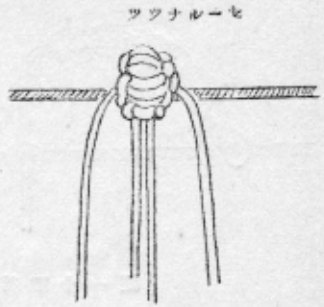


取つて、其れを芯絲として、ボタンホールナツツを十五個か二十個して、圖のやうな扇形を作つて、横絲に芯絲も結びます、と一つのスカロップが出來ます、第二十九圖のやうに、又第三十圖のやうに別に横絲に絲をかけて、同じことを繰り返へして、數だけの、スカロップを作つたものであります。

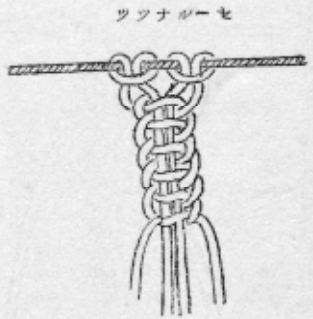
セールナツツ。

最初に數個のダブルナツツを作ります。第三十圖のやうに。

そして左右の結び絲を、横絲の下から上にかけて、先に



第三十二圖



第三十三圖

作つたダブルナツツの裏側で交叉させて第三十一圖のやうにしたものを締めますと、第三十二圖のやうになります。

以上で基礎編の大體の種類は説明いたしましたから次からは其れ等の基礎編を應用した實物を説明いたします。

第九　羽織の紐（其の一）

チエーンナツツを應用したもの。

材料、リリーヤン。

配合のよい二色を、各長さ三尺五寸を、何れも二本づゝ

編み方。

先づ、二色を一本づゝ、二本の絲で乳から初めます。眞中よりも、少し乳を編む長さ丈一方によせて、そこを別の絲で假に結んで置いて、そこをピンでとめて、チエーンナツツを二十程いたします。そして其の眞中をピンで留めて置いて、外側の二本の絲で圖のやうに結びますと、乳が出來ますから、其處に二本の結び絲を通しますと、都合八本となりますから、その八本の絲で、同じ色の絲は二本揃へて二重のチエーンナツツをします。三寸位の長さまでに編めましたら、内側の一本づゝ（別の色のもの）を結んで、殘りの絲を一寸五分位の長さに殘して切つて、房の足

第三十四圖　羽織紐房の作り方

第三十三圖　羽織紐乳の作り方

第三十五圖

房の作り方

ます。

し絲とします。そして、其れを揃へて、結び目の中に入れて、なほ殘つてゐます絲も房と一しよにまとめて、別の絲で堅く結びます。これで一本が出來上りましたから、之と同じものを今一本作ります。

第一〇　羽織の紐（其の二）

チエーンナツツ、スラントナツツを應用したもの。

材料、リリーヤン

白二尺、二本。エンヂ色、二尺、二本

編み方、紐の乳の作り方は、（一）の方法と同用に、チエーンナツツでいたします。そして乳が出來ましたら、其中央をピンでとめて置きまして、紐乳の結び目にエンヂ色を一本かけまして、都合六本の掛け絲にします。そして左からのスラントナツツと

第三十六圖　羽織紐出來上り圖

右からのスラントナツツとを、互ひ違ひにします。其の結び方は、最初三番目の絲を右斜に芯絲として、之れに四番目の絲で、左から、スラントナツツを三つして、次には左端の絲を右斜において、芯絲にして之にスラントナツツを二つします。次には右端の絲を左斜に芯絲として、三つスラントナツツをします。そして又左端の絲を右斜に芯絲として、之れにスラントナツツをします。そして又左端の絲を右斜に芯絲として、之れにスラントナツツを三つ致します。次は右端の絲を左斜に芯絲としておいて、スラントナツツを三つします。このやうにして、右からと左からとのスラントナツツを三つ宛に致しまして、適當な長さになりましたら、六本

の絲を二つに別けて、即ち三本づゝにして、各々其の三本で左からと、右からと、各其の端の絲を芯絲として結んでから、左右を一所にして、別の絲で假に結んで、其の輪の中に十本位の絲を、房の長さに切つたものを通して、絹絲でしつかりと結びます

第一一　羽織の紐（其の三）

編み方、チエーンナツツ、スラントナツツを應用したもの。

材料、リリーヤン

オリーブ色、三尺五寸、四本　　白　二尺　二本

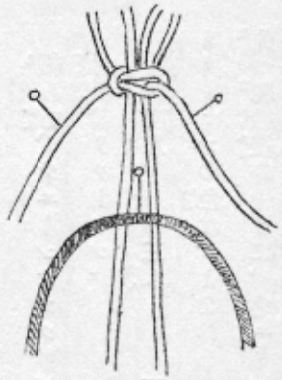
編み方。

紐乳の作り方は、其の一、其の二と同樣に作つてから編み初めます。

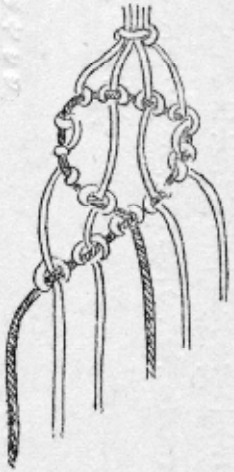
左一段、オリーブの左側の一本を芯絲として、左側の二本を順々に結びます。そして編み終りましたら、角にピンを刺します。

左二段、同じ芯絲で右斜に結びます。そして、この時芯絲を右手に持ち變へて前の

二本で結びますと、左の二段が出來ます。



第三十七圖　羽織紐其の三



第三十八圖　羽織紐其の三

右一段、オリーブの右側の方を右手に持つて、白二本を左から順々に結んで、其の角にピンを刺します。

右二段、白二本を結んですることは左側と同じであります。

左三段、右二段で結んだものが、左三段の芯絲になりますから、右一段の絲芯を左手に持つて、左二段の芯絲で結びます。第三十八圖のやうに、次に左側の白二本を左

へ順に結びます。このやうにして、一段二段三段を繰り返して、適當の長さに編んでオリーブが結び合つた所で編みとめます。そして其の二のやうに二つに分けて、三本として、左からと、右からと、各其の端の絲を芯として、スラントナッツをしますそして房をつけます。

第一二　時計の紐

編み方、チェーンナッツ、ダブルナッツ

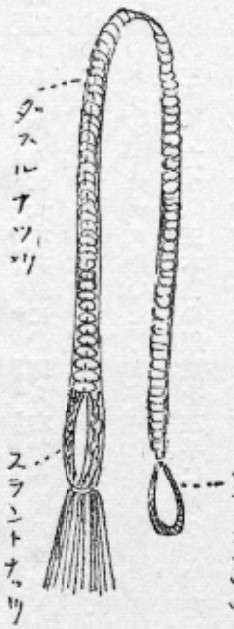
材料、リリーヤン。

四尺、　三本　　二尺、　七本。

リリーヤンの色は、よごれめのつきにくい少し濃い色を使つた方がよろしいです。

先づ羽織紐のやうに、チェーンナッツを、三十五乃至四十四尺の絲二本を二つに折つて結びます。そして輪を作つてそこを別の絲で、しつかりと結びます。そしてこの結び目に今一本絲を通しますと、絲の數は都合六本となります。(三本の絲が輪になりますから)其の六本の絲を以つて、チェーンナッツをした内側の二本と、今かけた絲二本は即ち四本を芯絲として、ダブルナッツを七十乃至八十いたします。次に其六本を再び二つに分けて、左右三本づゝにいたしまして其各々でスラントナッツを二十程結んで、又其の兩側の絲をまとめて、別の絲で結んで其の輪の中に房になる絲を通して、フレンチナッツのやうに結んで、房の長さをそろへて切ります。

第二十九圖



時計の紐出來上り圖

第一三　腕時計の紐

編み方　フラントナッツ。

材料、穴絲、銀鼠、一匁、黒、一匁

先づ最初に、銀鼠、黒、何れも長さ三尺三寸のものを六本切ります。そして二色を一所に全部まとめて絲で結んで、そこを針でとめて、十二本の絲を一本づゝ絲卷きに卷いて、銀鼠六本を右に、黒六本を左にして、一本づゝ並べて近寄らせてピンでとめておきます。

中の一段、六本の銀鼠のうち左端の絲を左手に持つて、左一の芯絲として、黒を右の端から、順々に六本共斜に、即ち右からのスラントナッツをいたします。

中の二段、左から二本目の銀鼠の絲を左手に持つて、左二の芯絲として黒六本で右からのスラントナッツをいたします。

中の三段。左から三本目の銀鼠を左手に持つて、左三の芯絲として、六本の黒で右からのスラントナッツをいたします。

中の四段、左から四本目の銀鼠を左手四の芯絲として、黒六本で右からのスラントナッツをいたします。

中の五段、五本目の銀鼠を左五の芯絲として、六本の黒で右からのスラントナッツ

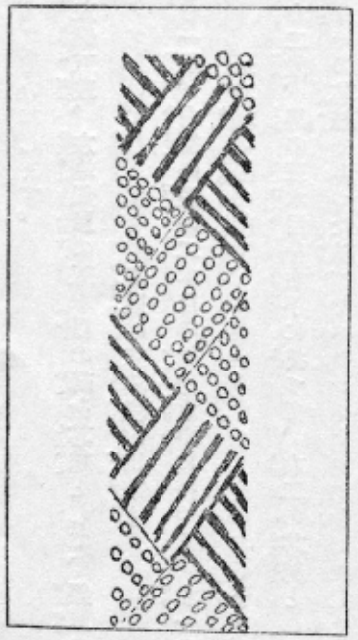
をいたします。

中の六段。銀鼠の右端を左六の芯絲として、黒六本で黒で右からスラントナッツをいたしますとこれで中央の六段が出來るのであります。次には右側を編みます。

左側一段。銀鼠の左端（前に一の芯絲であつた絲）を右手に持つて、左側一の芯絲として、銀鼠の二本目から六本目迄の絲で、左からのスラントナッツを中央を六段の模樣によく添はせて結びます。

左側二段、銀鼠の左から、二本目の絲を、右手に持つて、左側二の芯絲にして、銀鼠の、三、四、五、六の絲で左からのスラントナッツをします。

第四十圖



腕時計紐（アジロ編）

左側三段、銀鼠左端から、三本目の絲を右手に持つて、左側三の芯絲として、銀鼠の四、五、六の絲で、左からのスラントナッツをいたします。

左側四段、左端の銀鼠の四本目の絲を芯絲として、五、六の絲で左からのスラントナッツをいたします。

左側五段、左端銀鼠の五本目の絲を芯絲として、銀鼠の六の絲で左からのスラントナッツをいたしますと、銀鼠の三模樣が出來ます。

右一段、右端の黑の二本目の絲を右手に持つて、右一の芯絲として、其の芯絲の下から、最右端の黑の絲で、スラントナッツをいたします。

右二段、黑の三本目を右手に持つて、右二の芯絲として、黑の一の芯と、二の絲、(今一の芯絲であつた絲)でスラントナッツをいたします。

右三段、四本目を右手三の芯絲として、一、二、三の絲)今二の芯絲であつた絲)でスラントナッツをいたします。

右四段、五本目を左四の芯絲として、一、二、三、四の絲(今三の芯絲であつた絲)

でスラントナッツをいたします。

右五段、六本目を右五の芯絲として、一、二、三、四、五の絲(今四の芯絲であつた絲)で、スラントナッツをいたしますと、右に黑の三角模樣が出來ます。

此處で前の中央一段から、六段までの結び方を繰り返へしますが絲は黑の六本が右に、銀鼠の六本が左に、つまり、反對になつておりますから、黑の方を各の芯絲にして、銀鼠の方を結び絲とする丈が違ひますが、結んで行く順序は、前と同じであります。

次に左側も右側も色が入れ違ひになります丈で、方法は少しも變りませんから、六寸位の長さまで編みます。そして、初めと終りの端は、次の絲と次の絲とを結び合はせて、先に少し糊をつけておきます。

第一四　帶しめ（其の一）

編み方、スラントナッツ

材料、リリーヤン、茶とクリーム。

茶もクリームも二丈八尺の長さにして二本づゝ切ります。そして、茶二組を左側にクリームを右側にして貳組、横絲にかけて編み初めます。

1　左端から二番目の絲を芯絲として、これに左端から一番目の絲で、スラントナッツを一つします。

2　左端から四番目の絲を芯絲として、これに左端から三番目の絲で、スラントナッツを一ついたします。

3　次にこゝと同じ芯絲で、左側二本の茶の絲、即ち前にスラントナッツを一つした二本の絲で、スラントナッツを一つづゝします。

4　次には左から六番目の絲を芯絲として、左から五番目の絲で、スラントナッツを一ついたします。

5　矢張り左から六番目の芯絲に、左側の四本の前にスラントナッツをしました茶の絲で、スラントナッツを一つづゝいたします。

6　次には左から八番目の絲を芯絲として、之れに七番目のクリームの絲でスラントナッツを一ついたします。

7　又この芯絲に二本の茶と、四本のクリームとで、スラントナッツを一つづゝいたします。

8　次からは、右端の絲を芯絲として、之れにスラントナッツを七つ宛致します。これを繰り返へして絲の長さ丈編みますと、出來ますから、次には兩端に房をつけます。

9　房は結び殘りの八本の絲を四本づゝに別けて結んで、其の結び目に、茶とクリームを混ぜた絲を通して、根本を絹絲で結んでおきます。

第一五　帶しめ（其の二）

編み方、ダブルナッツ、三つ組

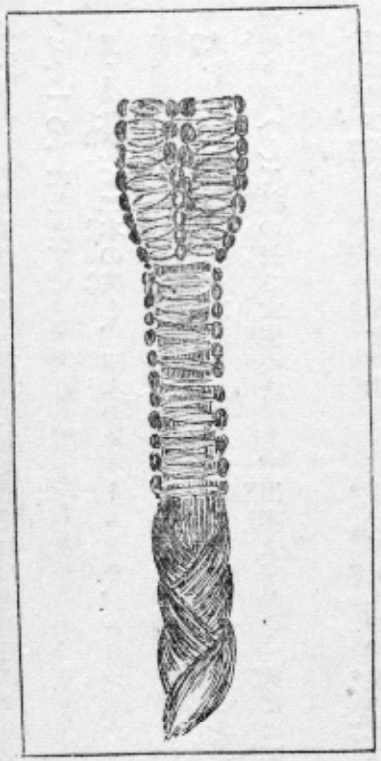
材料　リリーヤン、茄子紺、一把。　白、一把。

先づ最初に絲を左のやうに、茄子紺も、白も切ります。

一丈六尺　一本
一尺一寸　一本
三尺二寸　八本

三尺二寸八本の茄子紺の絲をまとめて、しつかりと結びます。そして、其の結び目をピンで留めて、其の左側に、茄子紺の一丈一尺の絲を二つ折りにしてピンで留めて並べ、右側には、矢張

第四十一圖　帶しめ　（其の二）



り茄子紺の絲を二つ折りにして、眞中にピンをさして留めます。そして留めたピンの上部の各の一本と、中央の八本の絲を輪にして留めておきます。そして手前にある長い絲丈絲卷きに卷いて置きましてから、編み初めます。

1　茄子紺の八本絲を芯絲として、それに左右の一本づゝの絲で、ダブルナツツを六ついたします。

2　次には、白も、茄子紺と同じやうにまとめて、但し一丈一尺に切つた絲を右側に、一丈六尺に切つた絲を左側にして、ダブルナツツを六ついたします。

3　次には、1と2で結んだものを一所にして並べます。

4　そして、右端の茄子紺の八尺の絲と、左端の白の八尺のものとで、ダブルナツツを十ケいたします。

5　次に左右の色を別けて、右側の茄子紺の絲と、右側の白の絲とを別々にダブルナツツを十二ケいたします。

6　次に、茄子紺で編んだ十〇ダブルナツツと、白で編んで十二ケとで編んだダブ

ルナッツとを一所にまとめて、又ダブルナッツを十ケいたします。

7　次にはこの十二ケづゝ編んだ茄子紺と、白とのダブルナッツの二筋と、それ等を一所にまとめた十ケのダブルナッツの一筋とを、交互に八寸五分位編みます。

8　次に全部を三つに分けて、三つ組に四寸五分位いたします。そして端を絹絲でしつかりと結んで、房を殘して切ります。

9　これで、帶しめの半分が出來上つたのでありますから、今半分も同じやうにして編みます。この帶留めは、簡單で、延びにくくて宜しいです。

第一六　帶しめ（其の三）

編み方　スラントナッツ、チエーンナッツ、三つ組

材料、　エンヂ、白、白茶、各一把。

右の材料を二丈四尺づゝに四本づゝ切ります。そして全部の絲を、絲卷に卷いて、次のやうな順序に並べて、横絲にかけて、編み初めます。右端から、エンヂ二本、白

茶二本、白四本、次に又白茶二本、エンヂ二本。

1　其の二の帶しめと同樣に、中央から編み初めて、片方は一方が出來上つてから同じ方法で又編みます。先づ横絲に、全部の絲で、スラントナッツをいたします

2　左から二番目の絲を、左斜に芯絲としておいて、これにスラントナッツを一つします。

3　四番目の絲を、左斜めに芯絲としておいて、これに、スラントナッツを二つします。

4　六番目の絲を左斜めに芯絲として、これにスラントナッツを三つします。

5　八番目の絲を左斜めに芯絲として、これにフラントナッツを四つします。

6　十番目の絲を左斜めに芯絲としておいて、これにフラントナッツを五ついたします。

7　十二番目の絲を左斜に、芯絲としておいて、これにスラントナッツを六ついたします。そしてこれで左からのスラントナッツが終りました。

8 次には、右からのスラントナッツをいたします。先づ右から二番目の絲を、右斜に芯絲として、これにスラントナッツを一つします。

9 次に右から四番目の絲を、右斜に芯絲として、これにスラントナッツを二ついたします。

10 六番の絲を右斜めに芯絲として、これにスラントナッツを三ついたします。

11 八番目の絲を右斜に芯絲として、これにスラントナッツを四ついたします。

12 十番目の絲を右斜に芯絲として、これにスラントナッツを五ついたします。

13 十二番目の絲を右斜に芯絲として、これにスラントナッツを六ついたします。

14 次には左端の二本で、チエーンナッツを二ついたします。

15 次も同様に、左端から三、四番目の絲で、チエーンナッツを二つします。

16 同じやうに、五、六番目の絲で、チエーンナッツを二つ、七、八番目の絲で、チエーンナッツを二つ、九、十番目の絲で、チエーンナッツを二つ、十一、十二番目の絲で、チエーンナッツを二ついたします。

17 次には、右端の絲を右斜に芯絲として、之れにスラントナッツを五つ致します。

18 又左端の絲を右斜に芯絲として、これにスラントナッツを四ついたします。

19 又左端の絲を右斜に芯絲として、これにスラントナッツを三ついたします。

20 又同様に左端を右斜に芯絲として、これにスラントナッツを二ついたします。

21 次には左から十二番目の絲を右斜めに芯絲として、これにスラントナッツを六ついたします。

22 次には、右から十三番目の絲を左斜に芯絲としておいて、之れにスラントナッツを五つします。

23 次には、左から十二番目の絲を、右斜に芯絲として、之にスラントナッツを五ついたします。

24 右から十四番目の右斜に絲を芯絲として、之れにスラントナッツを四つします

25 左から十二番目の絲を右斜に芯絲として、これにスラントナッツを三ついたします。

26 二十五と同様にします。

27 右から十二番目の絲を、左斜めに芯絲として、之れにスラントナッツを二ついたします。

28 右から十二番目の絲を右斜に芯絲として、之れにスラントナッツを二つします

29 次には左端の絲を左斜に芯絲として、之にスヲントナッツを一つします。

30 左端から、十二番目の絲を左斜に芯絲として、之れにスラントナッツを一ついたします。

31 次には、左端の絲を左斜に芯絲として、スラントナッツを五ついたします。

32 左端の絲を左斜めに芯絲として、之れにスラントナッツを四つします。

33 又左端の絲を左斜めに芯絲として、之れにスラントナッツを三つします。

34 又左端の絲を左斜に芯絲として、之れにスラントナッツを二ついたします。

35 次には、二本でチェーンナッツを二ついたします。

36 次には、左端から七番目の絲を左斜に芯絲として、之れにスラントナッツを

六ついたします。

37 次には、左端から八番目の絲を左斜めに芯絲として、之れにスラントナッツを六ついたします。

38 次も同様に、左端から九番、十番、十一番、十二番の絲を夫々左斜に芯絲として、之れにスラントナッツを六つづゝいたします。

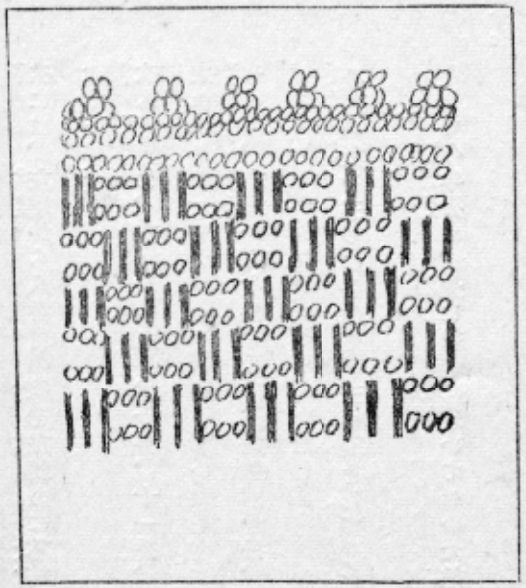
39 次には、右端から七番、八番、九番、十番、十一番、十二番の絲を右斜に芯絲として、スラントナッツを六つゝいたします。かやうにして、八寸程編みます。

40 全體の數を三つに分けて、三つ組をして先を房の長さ丈殘して、絹絲で結びます。

41 そして今半分は、先に絲卷に卷いておいた絲を絲卷から解いて前と同様に編みます。

第一七 ネクタイ（結ぶもの）

第四十二圖　ネクタイ（其の一）



編み方　スラントナッツ、ビコット。

材料　リリーヤン、黒、七把。茶、二把。

と茶のリリーヤンを左のやうに切ります。

黒　一丈六尺　十二本

同　一丈一尺　十二本

茶　二把を其のまゝ卷いて置きます。

長いネクタイは、眞中から編み初めても宜しいですが、こゝでは兩端から初めて、眞中でつなぐ樣にいたします。

1　先づ一丈六尺の黒のリリーヤンを半分に折つて、ビコットを二つづゝ十二本ともいたします。

2　ビコットをピンでとめて置いて、横絲を一本かけて、それにフラントナッツを一段いたします。

3　同樣に横絲をかけて、フラントナッツを三段いたします。

4　左端の黒を芯絲として、茶色でフラントナッツをいたします。

5　次に二本目の黒を芯絲として、茶でフラントナッツをいたします。

6　次に茶色を右手の水平の芯絲として、三番目と四番目の黒で、フラントナッツをします。

7　このやうにして、この一段目を繰り返へして、右の端にピンを打つて、同じ方法で左へかへります。

8　茶色を右手の芯絲として、黒二本でフラントナッツをしますと、前の模樣と反對に市松になりますから、又この一段も同樣にして、ピンで留め右へ歸ります。

9　このやうに一段と、二段とを繰り返へして、長さ一尺一寸位迄編んで、茶の色

が不足しましたら、左か右の端で絲をかへて續けます。絲を足すときには、兩方共端を一寸位づゝ殘しておきます。

10　次に衿の廻りの細いところは、全部の絲では太過ぎますから、茶色の絲を二寸殘して切つておきます。

11　先づ左端から二本目の絲を芯絲として、左端の絲でフラントナッツをいたします。

12　左端から四本目の絲を芯絲として、其の左の絲で、フラントナッツをいたします。

13　次には、六本目、八本目と順次同じ方法で、偶數の絲を芯絲として、其れに、各其の左端の奇數の、五本目と七本目の絲で、フラントナッツをいたしますと、三角形が出來ます。

14　次には、左端だけ順に細くなつてゐますから、右端丈絲の數を減じます。

15　次に右端の一本を、其のまゝにして、二本目を左手の芯絲として、フラントナッツをいたします。

16　兩方共同じに減らしましたら、其のまゝ初めから計つて、一尺六寸五分位迄、フラントナッツをして、終りは三角のまゝ、一寸程絲を殘して、切つておきます。これでネクタイの半分が出來ましたから、もう半分もこれと同じやうにして、市松模樣の處を八寸位、衿廻りの處を、一尺二、三寸編みます。そして、表と裏とを突き合せて、三角のところで合はせて、兩方の一本づゝをこま結びにして一分位殘して切つて絲の切り目に糊を少しつけます。茶色の兩端も、こま結びをして、兩方共絲の先に糊をつけて切つて、兩方へくゞらしてから、絲を切ります。

17　次には巾を細くした右側を、そのまゝ裏へ二、三本くゞらしてから絲を切ります。そして切り目に糊をつけて置きます。

第一八　ネクタイ（蝶形）

編み方　フラントナッツ

材料　リリーヤン黒、五把。　ネクタイ金具。

右の材料を次の樣に切ります。

一丈一尺　六本

一丈　十一本

二尺　六本

結びネクタイは蝶形の所と衿廻りと、蝶の結びとの三ケ所を別々に作つて、それを組合せてネクタイの金具をつけます。

蝶形の作り方。

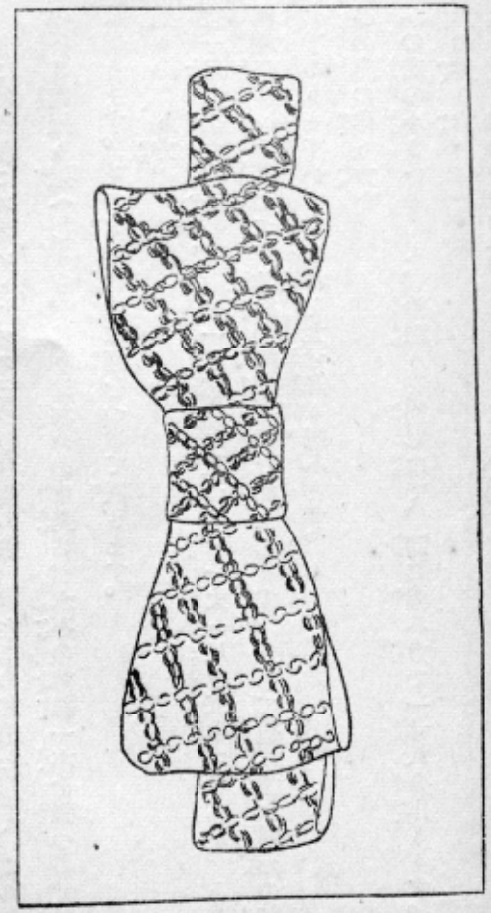
横絲を五寸位の長さに切つて張ります、そして其の横絲に、一丈に切つた十一本の絲をかけます。そして編み初めます。

1　左からの二本で、フラントナッツを二つして、其の右の一本を左手の芯絲として、今フラントナッツをした六本で結びます。

2　次にこの芯絲と其の右の絲で、三つフラントナッツをして、其の右二本、又右

二本とフラントナッツを三つづゝいたしますと、右に一本殘ります。

3　殘つた右の一本を左手の芯絲として、其の左側全部を結びます。



（圖り上寸五三）　ネクタイ結び方　圖三十四號

4　次に又左から二本づゝで、フラントナッツを三つゝいたしますと、右端に前に一本殘つてゐますから、全體でフラントナッツが十一筋出來ます。

5　次に右の端にフラントナッツ三つの右側の絲を、左手の芯絲として、これを八寸程の長さ迄繰り返へします。終りは初めの反對に、水平の芯絲一本を張つて、殘りの絲は切ります。その切り口には糊をつけて置きます。

衿廻りの作り方。

一丈一尺に切つた絲の眞中を一本芯絲に張つて、一丈一尺を五本かけます。そして其の兩端にピンを打つて、芯絲の兩端を編む絲にします。そして編み方は蝶形の部分と同じでありますから、これを九寸許り編みます。

結びの處の作り方。

結びの處の小さいものも、衿廻りと同じ巾で、同じ編み方で一寸八分作ります。

蝶形の作り方。

蝶形の裏で兩方の端を重ねまして、中を低くして、カタン絲でしつかりと結びます

其れから、蝶形の裏に九寸の方の眞中の處を重ねて、又しつかりと結びます。そして別に作つた、一寸八分の編んだものを上から格好よく卷いて、裏でしつかり縫ひつけて、一寸八分に編んだものの裏形と九寸の衿廻りの兩端に金具とゴムをつけて仕上げます。

第一九　菜（其の一）

編み方　スラントナッツ、ダブルナッツ。

材料　リリーヤン黑、赤。

先づリリーヤンを黑も赤も二尺の長さに八本づゝに切ります。

1　先づ赤八本を眞中にして、其の兩側に四本づゝの黑を並べます。

2　赤の左の一本を左手の芯絲として、其の左の黑で、スラントナッツをいたします。

3　次に赤の左二本目を左手の芯絲として、黑の四本と今一の芯絲とで、スラント

第四十四圖　柔（出來上りの圖）

ナッツをいたします。

4　次に今結んだ黒の右から二本目を右手の芯絲として、其の右の一本で結びます

5　次から二本目を右手の芯絲として、其の右の一本でスラントナッツをいたします。

6　次も亦左端から二本目の赤を右手の芯絲として、其の右の一本でスラントナッツをいたします。

7　次に初めの左から三本目の赤を、左手三の芯絲として、其の左の黒四本と、其の左の赤二本とを結びます。

8　次に初めの赤の左から四本目を、左手四の芯絲として、其の左の六本と、いま三の芯絲であつた赤とで結びます。

9　右側も同様にいたします。

10　次に黒の中央の四本を中心として、其の兩端一本づゝで、ダブルナッツをいたします。

11　次に左赤の右側の一本を右手一の芯絲として、其の右の黒四本で結びます。

12　同じく二本目を右手のコードとして、其の右の黒四本と、今一の芯絲であつた絲とで結びます。

13　今結んだ黒の左から、二本目を左手の芯絲として、其の左の一本で結びます。

14　次に黒の右端を左手の芯絲として、其の左の一本で結びます。

15　次に黒の左から、二本目を右手の芯絲にして、其の右の黒四本で結びます。こ

れで左の半分が出來ましたから、左の半分もこれと同じ様にして結んで參ります。

16　次に兩端の黑で、チエーンナッツを十二と、其の内側の黑で、チエーンナッツを九ついたします。

17　中の模様の作り方、右側二の芯絲の赤を左手一の芯絲にして、其の左の赤四本で結びます。

18　次に左二の芯絲であつた赤を右手一の芯絲として、其の右の赤三本で結びます

19　次に左一の芯絲の赤を、左手二の芯絲として、其の左の二本と今一つの芯絲であつた絲とで結びます。そして、こゝにピンを打つてこの芯絲を右手に持ちかへて、其の右三本で斜にスラントナッツをいたします。

20　次に、今左にあります赤を、右手の芯絲として、其の右の二本と、今芯絲であつた絲とで結びます。

21　これは左側の作り方で、右側も同じ方法で作ります。そして右側一の芯絲について左一の芯絲と、其の左の一本とで結びます。

22　赤の左二本目を左手の芯絲にして、其の左の一本で結びます。

23　右側も同じやうに、二本目と四本目とを芯絲として、各其の右の一本で結びます。これで模様が出來ましたから、これと同じ方法で今一つの模様を作ります。

24　それから中の十二本を芯として、左右兩側の二本づゝを以つて、ダブルナッツ三つをいたします。そして房を一寸五分位の長さに切つておきます。

第二〇　卷煙草入（敷島形）

編み方　スラントナッツ、シングルナッツ。

材料　リリーヤン、金茶、黑、各三把。

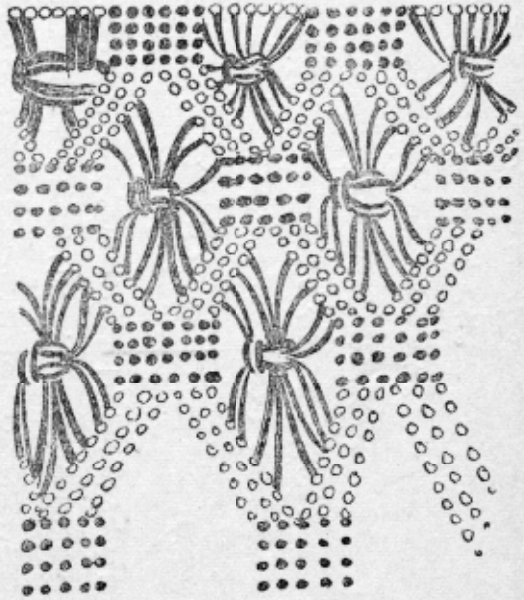
絹のくゝり絲、一尺六本。

金茶と黑を次のやうに切ります。

金茶　三尺　二十八本。

黑　三尺　二十八本。

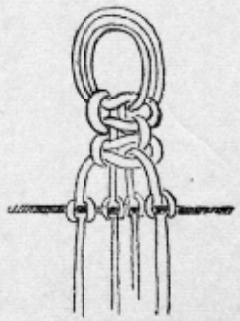
第四十七圖　卷煙草入（數模鳥樣の圖）



先づ紐通しから編み初めます

1　先づ基礎になる芯絲を張つて、其れに五十六本の絲を二つ折りにして、其の輪を以つて頭をつけます。この模樣は、八の倍數が宜しいです。

第四十六圖



2　頭をつけたところから、一分位下つて、左の端から四本を取つて、ダブルナッツをいたします。第四十六圖のやうに。

3　左端から二本を殘します。これは袋物のやうに、輪になつてゐるものを作りますには、模樣をつぐために、兩端の絲を必ず殘します。この殘した絲のことを、空絲と申します。空絲を二本殘して模樣に取りかゝるのです。

4　四十本の絲を次の樣な順序に並べます。金茶と黑の三尺に切つたものを、八本づゝ即ち十六本の眞中を、左の順にピンを打ちます。黑八本を中央に、其の左右へ金茶四本づゝ並べます。

5　次にクリームの左端を、左の芯絲として其の左の金茶で、スラントナッツをいたします。

6　次に其の右の黑を、左の芯絲として、其の左の金茶四本と、いま芯絲であつた黑とで、スラントナッツをいたします。

7　次に三本目の黑を芯絲として、其の左の金茶四本と、前の黑絲とも二本で結びます。

8　次に四本目を芯絲として、金茶四本と黑三本で結びます。そして左の端にピン

を打ちます。

9　右側は左側と同じであります。

10　次は中央の金茶四本を中心として、其の兩端の二本づゝで、ダブルナッツを一つします。

11　次は左のピンを打つて絲を右の芯絲として、其の右の黑三本と、其の右の金茶とで結びます。

12　次に今左にある黑を、二つの芯絲として、其の右全部と、今芯絲であつた絲とで結びます。

13　次に左にある黑を三つの芯絲として、其の右の黑一本と金茶とで結びます。

14　次に左端の黑を四の芯絲として、金茶の四本の絲で結びます。そして右側も同じやうにこれを繰り返へします。

15　次に左端の黑を右手の方に水平にして、其の右の黑全部で結びますと、第四十五圖のやうに水平の部分が出來ます。

16　次に右の端をピンで留めて、左手に持ちかへて左手の芯絲として、隙間の出來ないやうに、左の黑の全部で結びます。

17　次に左端にピンを打つて、右手に水平になる結びを作ります。

18　次に右端にピンを打つて、左を芯絲として結びます。

19　次に左端の二本目の金茶を左手の芯絲として、一本目の絲で結びます。

20　次に三本目を左の芯絲として、其の左の今結んだ絲と、今芯絲であつた絲とで結びます。

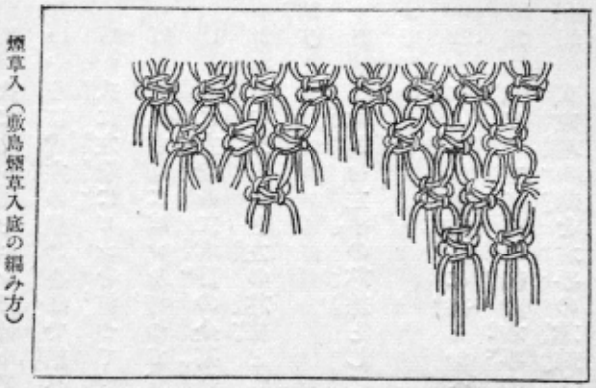
21　四本目を左手の芯絲として、其の左の二本と、今芯絲であつた絲とで結んでピンで留めます。

22　次に其れを右手に持ちかへて、右手の芯絲として、其の右の三本で結びます。

23　次に今左にある絲を右手の芯絲として、其の右の二本で結びます。

24　又左端の絲を右手の芯絲として、其の右の一本で結びます。右側も之れと同じです。

第四十八圖



煙草入（敷島煙草入底の編み方）

25　次に黒の左から四本が芯絲となります。

26　そして(3)から(23)迄の編み方を繰り返へして、凡そ長さ二寸位迄編みます。

27　そして丈が編み終りましたら、今度は兩端に殘して置きました絲で、模樣をつなぎ合せて、前の長さ迄編みます。

28　そして次には底を編みます。底は第四十八圖のダブルナッツで作ります。

29　胴と同じやうに兩端に二本の絲を殘して編みます。

30　先づ第四十八圖のやうな、ダブルナッツを四つだけ、矢張り左右に二本の絲を殘して、四段結びますと、ダブルナッツが六つになります。

31　次に、ダブルナッツ四つを四段いたします。

32　次に又ダブルナッツ十を四段つゞけます。

33　それから結び合はせます。先づ四つの方の左の空絲と、十の方の右の空絲と兩方から一づゝ取つて、裏でしつかりと、こま結びをします。これを兩方四段の終りまでして、一分程殘して切り、かやうにいたしますと、こま結びが九つと角が一つ出來ます。そして他の三つの角も、これと同じ方法でとめます。かやうにいたしますと、六つのダブルナッツが突き合ひますから、其の兩方の各一本づゝを取つて、しつかりとこま結びをいたします。そして裏側は少し糊をつけておきます。これで底も出來上りました。

34　紐の通し方、絹のくゝり絲の一尺に切つたものを、三本づゝを一組として、それを三つ組にします。そして最初のピコットに通しまして、先をカタン絲でしつかり結んで房を作つて切ります。

第二一　手提

編み方　スラントナッツ、シングルナッツ、スカロップ。

材料　リリーヤン、茶、四把。クリーム、一把。

裏用金紗縮緬か羽二重。

次のやうに切ります。

茶　二尺六寸、　三十四本（一把ぶつ切り）

クリーム　二尺六寸、　十六本。

茶　二尺九寸、　十六本（紐通し）

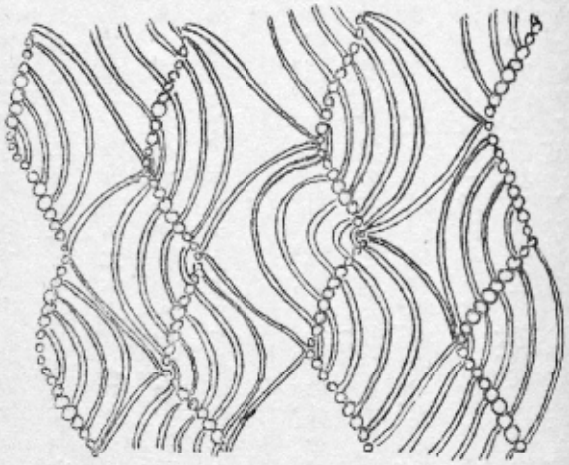
茶　二尺五寸、　八本（紐）

クリーム　二尺五寸、四本。

茶　一尺五寸、五本（芯絲）

先づ紐通しから編み初めて、だん〳〵底にうつります。

第四十九圖　手提袋の模樣の圖



1　紐通しの編み方、クリームの二尺九寸を二本一緒にして、羽織紐乳のやうに、編み絲の中央より、少し片方に寄つた處にピンを刺して、それにスカロップを二十いたします。そして同じ長さのもので、この作り方の紐乳を八ついたします。

2　次に茶の二尺六寸、五十本、各一本づゝで次の樣なものをつくります。絲の眞中をピンで留めて、其の兩絲でナッツ二ついたします。

3　茶の一尺五寸二本を芯絲として、これに全部の絲を組み合せます。

4　先に結んだ茶の二尺六寸を三本と、スカロップを作つたクリームの絲を次にして、全部の絲を結びます。

5　それから模様にとりかゝります。左端の一本を、右手の芯絲として、其の右の茶の三本と、クリーム二本とで、スラントナッツをいたします。

6、次に其の右のクリーム一本を、右手の芯絲として、其の右のクリーム一本と、茶の六本とで、スラントナッツをいたします。このやうにして、全部一段をいたします。

7、左から二つ目の模様の左端の絲を、左手の芯絲として、其の左の模様の芯絲であつた絲と、其の左の七本で結びます。

8　次に左から三つ目の模様の、左端の絲を、左手の芯絲として、其の左の七本で結んでこの段を一段編みます。

9、左端の模様で、一段の芯絲であつた絲を、右手の芯絲として、其の右の二段の芯絲であつた絲と、其の右の七本の絲で結びます。そしてこれを十三段迄繰り返へします。

10、編み終りましたら、兩端の絲で模様をつぎ合せます。

11、十三段迄いたしましたら、其の下に芯絲を張つて、フラントナッツをいたします。

12、次に各絲を二本にして、フラントナッツを二つ宛して、次の芯絲を張つて、全部フラントナッツをいたします。

13、次に底の房を作ります。出來上つた手提を模様を正しくしてピンを打つて、左端の上部の一本と下部の一本で、チエーンナッツ八ついたします。

14、次に其の上部の一本と、下部の一本を左手に持つて、其の右の上部の三本と、下部の三本とを眞中にして、其の右の上部の一本と、下部の一本とを右手に持つて、兩方二本づゝで、右からスカロップ一つ、左からスカロップ一つ、次に右から、左からとスカロップを五ついたします。

15、次に全部の十本を芯絲として、其の左右の鎖二本の絲で、ダブルナッツを一つ

大阪

いたします。そして結び目に薄糊をつけておきます。

16　紐は茶の二尺五寸二本と、クリームの二尺五寸一本で、三つ組をしたものを二本作ります。そして紐通しに通して二本の紐を結びます。

17、仕上つた手提の口の巾に合せて、其れよりも五分大きく、巾は其れより一分位大きく裁ちます。そして丈と巾とを袋縫ひにして、今一方の幅は袋の口になりますから、仕上げた手提より長い目に、三つ折り紵けの端を、手提けの基礎の芯絲のフラントナッツに、細かく紵けつけます。この時、袋の裏と手提の裏とを合はせるのであります。中に入れる布は、勿論編み絲と配合のよいものを用ひなければなりません。

第二二　ランプカバー（其の一）

編み方、スラントナッツ

材料　リリーヤン　藤色と白との染分　一把。
　　水色と白との染分　大束一把。

絲の切り方、藤色と白の染め分けも、水色と白の染別も、束になつてゐる輪を一方だけ切つて、何れも四十本づゝ切ります。其れから編み初めます。

1、先づ基礎になる芯絲を張つて、之れに藤色二本、水色二本とを交互し左端から編みます。

2、次に其の結び目から五分位下つた處で、左端の藤色四本、其の右の水色と白の染め別の四本の絲にもピンを打ちます。

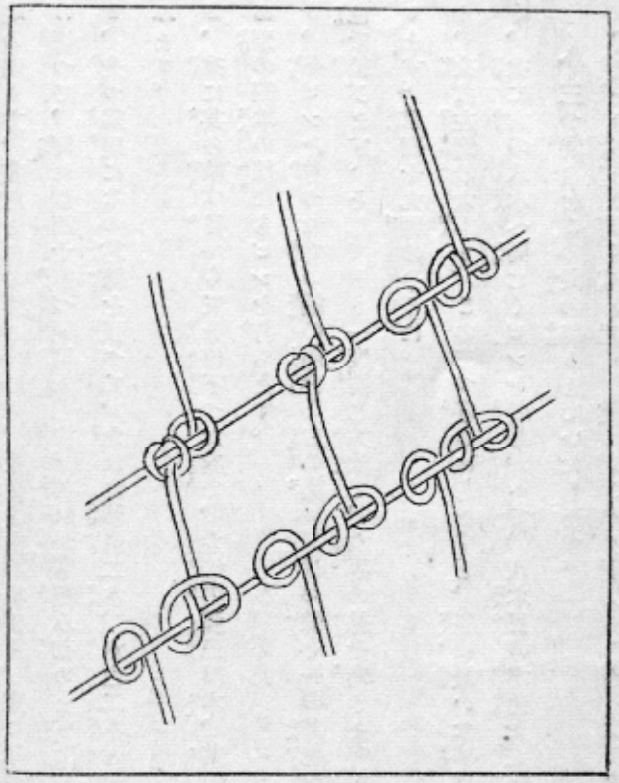
3、今ピンを打つた右の端の藤色と白の染め分けの絲を一の芯絲として、其の左の水色で結びます。そしてもう一度同じ方法で、右手の絲を巻きますと、三つの結びになります。第四十九圖のやうに。

4、次は左側の六本も、この三つ巻きにしますと、斜に續いた結びが出來ます。

5、次に右の八本へ同じくピンを刺しかへて、八本目の水色を左手二の芯絲として同じく、三つ巻きをこの段の終りまでいたします。

6、左一の芯絲の結び方の初めと終りにピンを刺します。そして左一の絲を空絲と

第五十圖　ランプカバーの其一編み方



して、二の芯絲を左手に持つて、左一の芯絲で結んだ水色の三本と藤色の四本で結びます。この時一の芯絲と、二の芯絲との間を、一段の斜に結んだものになつて、いつも同

じ間を置いて結びます。

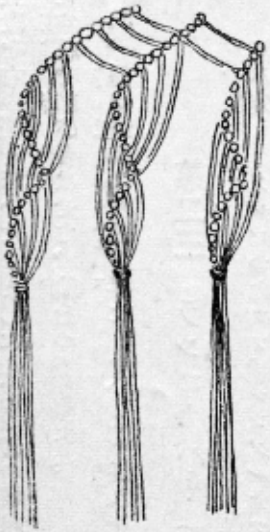
7、三の芯絲も同じくピンを刺して、二の芯絲で結んだ七本の絲で、同じ間になるやうに結びます。そしてこれを右の端迄いたします。

8、二の芯絲を空絲にして、三の芯絲に二段で結んだ七本で結びます。

9、三段の結び終りで、結びピコットを一つして、其のピコットにピンを刺して、芯絲を右手に持ちかへて、右の芯絲として、八十本共三つ巻きの結びをいたします。

10、四段の結び終りにも、結びピコットをして、其の結び目に、ピンを刺します。

第五十一圖



ランプカバー出來上りの一部

11　次に左の芯絲に持ちかへて、七本の絲で結びます。そしてこゝにも結びピコットをして七本の絲を並べて、カタン絲でよく結んでおきます。

12、このやうにして、四段、

五段を右の端までいたしましたら、最初の横絲をピンからはづして兩端に殘しておいた空絲を結び合はせて、輪をつくります。

31、房は最初の横絲を手にして、よく長さを揃へてから切ります。

第二三　ランプカバー（其の二）

編み方　フレンチナッツ、シングルナッツ、スラントナッツ。

材料　リリーヤン小束一輪

リリーヤンを束のまゝ丈を切ります。そして二本の横絲を張つて、鏝台にとめて編みます。

1、横絲に六十四本の絲をかけます。絲の數は竹の大きさによつて定めるのですが八の倍數の方が模樣の都合が宜しいです。

2、次にフレンチナッツを七段いたします。そして全體の數を八等分して其の一つの部分の結び絲の十六を一組として、其の左端の一本を芯絲としてスラントナッツを

十六いたします。

3、次に其の一組の絲を二分して、左半分の八本の絲の右端の一本を芯絲として、スラントナッツを端までします。其の數は七つで、其の形は八の字のやうにいたします。そしてこれを二回繰り返します。

4、次に左の半分が出來ましたから、右側も同じに結びます。そして中心の絲を兩方から二本づゝ取つて、その絲を斜の井の形に絲をたがひちがひに組みます。

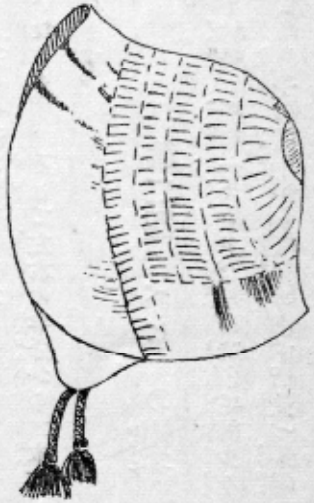
5、次に今組んだ絲を左右に分けて、又先の八の字と反對に、スラントナッツを三回いたします。そして左右の半分から二本づゝ絲を取つて、シングルナッツを一ついたします。

第二四　ベビーの帽子

材料　極細一オンス。外に時色毛絲少々。

1　帽子の眞中から編初めます。先づ最初に輪を作つて鎖編を三つして、其の輪の

第一圖



中に長編を二十入れて、絲を引き締め最初の鎖編の上で留めます。

2　二段目は、端に鎖編三つをして（各段共端に鎖編三つをします）次からは、一段の一目の所に長編を二つづゝ入れます。

3　三段目は、一目おきに長編を二つづゝ入れます。

4　四段目は、一目に一つづゝ長編を入れます。

5　五段目からは、十二目を殘して、鎖編三つをして裏に返へして、一目に一つづゝ長編をします。

6　そして又其處から裏にかへして、長編をいたします。かやうにして、五段繰り返へしますと自然に形が出來ます。赤ん坊の頭の大さによつて、段數を見計らひますが、もしこれで餘り帽子の開きの足りないと思ひますときは、四目、五目毎に一目づゝ長編を餘分に入れて、目數を增します。しかし同じ場所で增さぬ樣にします。

7　飾、飾りは、廻り全體につきます。帽子の表をみて、大長編をなるべく目を長くゆるく、一目に二つゞゝ入れて、端迄編ます。そして、一廻り出來ましたら、其の上に絹絲で鎖を一つ、短編一つを色取りをします。

8　紐、白の毛絲と、絹絲とを少し混せて房を作ります。

第二五　子供帽子（二三歲用）

材料　太毛絲二オンス。

この帽子は、男兒にも女兒にも用ひられる恰好であります。

1　先づ鎖を四十一目編みます。そして第二の圖から、全部に短編を入れます。

2　二段目からは矢張り短編を致しますが、先の短編の向ふの目一本を抄つて編ます。さうしますと、編目に凸凹が出來て、横に縞目が出來ます。之を短編の山編と云ひます。そしてこの山が十六山出來ましたら絲を切つて、出來上つた長方形の物を縱

に半分に折つて、兩横を縫ひ合せます。

3　そして其の廻りを縫ひ合せて、短編でグン〳〵十二段廻つて、次には向をかへて、反對側から一段、此の時は先の一本を抄つて短編をいたします。

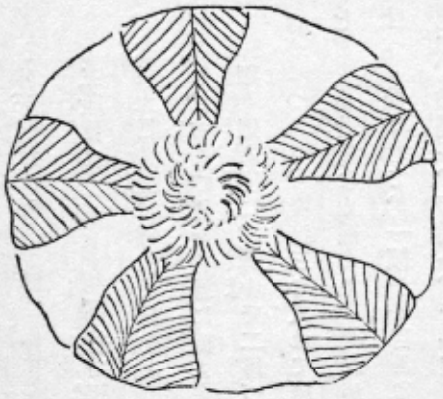
4　廻りは反對側から一段、此の時は、先の一本を掬つて短編をして廻ります。次の段では重ね松編を致します。

5　松編の仕方、初め二目飛ばして長編を一目に五回入れて、又二目飛ばして止めます。次もこれと同じことをします。次のこの通りに全部一廻りをして、最後の松編は最初の松編の丁度眞中の目に留めます。

6　二段目からは、一段で留めた目、即ち低いところへ長編五つを入れて、高い所の眞中でとめます。此の時松編を六段して、よく終りを止めておきます。松編の形は上向に折り返へるやうになります。

7　毛絲を四本位一緒にして鎖編をし、其の先に一寸五分位の長さの房をつけます。

第二圖　帽子（大黒帽子）



第二六　子供帽子（大黒帽子）

材料　毛絲中細、時色、エンヂ各一オンス。

この帽子は、二、三歳から、六、七歳迄の子供に適當した形でありまして、二、三歳位なら、男兒女兒の何れに用ひましても宜しいです。

1　眞中から編初めます。エンヂの色で輪を作つて、鎖を三つして其の輪の中に長編を一つして、又鎖を三つといふ風にして、九つ長編を入れます。

2　二段目は、鎖の中に短編を五つ入れて時色と絲をとりかへて、先の鎖の處に短編を

五つ入れます。そして絲は交る〳〵とりかへますと、エンヂ色の處が五つと、時色の處が五つ出來ます。

3　三段目は、エンヂ色の絲で短編を二つづゝ編んで、次の一目に短編を三つ入れて、次は二目普通に編んで絲をとりかへて、今と同じに二目を編んで、眞中の一目に三目入れ、次の二目を普通に編みますと、一模樣の目數が七つとなります。このやうにして一廻り廻る度に、眞中で二目づゝ增して、直徑三寸五分位の大さになりましたら、少しづゝつめて、今迄三つ入れて居た眞中の目は矢張り外と同じやうに一目づゝ入れて七、八分增減なく編んで、其れから絲の變り目毎に前後の目、即ち低くなつた處で二目づゝ飛ばして、一縞が十目となる迄目を減じます。此處で一方の絲を切つて一色にして、鎖編一、短編一、で一廻りいたします。

4　三段目からは、矢張り同じ編方で、鎖編の中に短編を入れ、短編の上に鎖編を入れて、又七、八分編みます。

5　次に鎖編三つ同じ處へ長編一を入れ、三つ目に止めて一廻り致します。

6　頂上に大きい房をつけます。

第二七　袖無スエーター

材料　絹レース、黑、五つ。セーヂ色、十五。

但し毛絲の極細位を用ひても宜しいです。

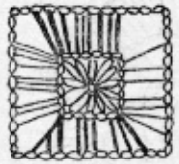
1　鎖を五つ輪として、鎖三つしてから輪の中に長編を二十三入れます。

2　次の段は（一圖のやうに）、四ケ所で一目へ長編を六つ、三段目には、角の鎖の中へ長編六つを編ますと、（ロ）のやうな形になります。

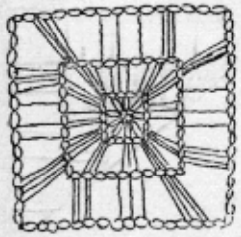
3　これで一つの四角の形が出來ましたから、黑とセーヂを各々三十六ケづゝ合計七十二個とハのやうな形の三角を、一つづゝ作ります。

第三圖

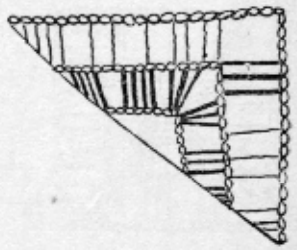
イ



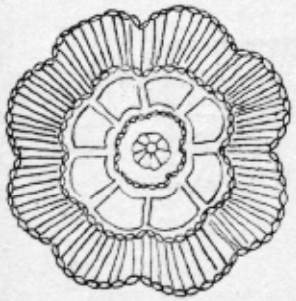
ロ



第四圖
ハ



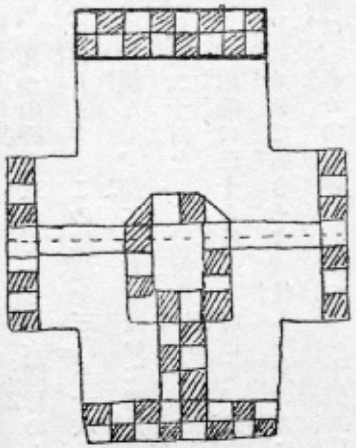
第五圖
ニ



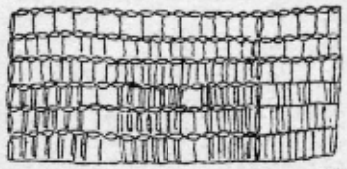
4　三角の作り方、鎖五つして輪にしましたら、鎖三つして長編を十一作つて、鎖五つして、裏側から終りの目へ三つ入れ、一つとばして長編を一つ目に一つづゝ三つ編み、一目とばして長編三、鎖二、長編三を作つて、一目おいて長編をして、最後の目で又長編三つ、鎖一つ、長編一つを作つて、三段は鎖五つ、長編を前段最後の目へ三つ入れ、鎖一つ、前段長編の終りに、次の長編の間へ一つ、鎖一つ、一目おいて、長編一つ、鎖一つ、長編一つ、一目おいて鎖一、前段鎖二の中に表編三、鎖三、長編三を入れます。

5　次にセーヂ色で裾の飾を、二圖のやうに長編で十一個編みます。

第六圖
ホ



第七圖
ヘ



6　次に四角を黒とセーヂが交互になるやうに綴ぢ合せます。ホ圖のやうに肩の一筋の中央が肩山ですから、後へ二つと、其の兩端へ三角を附けます。斜線をセーターでしたら、袖口は片方の山が黒になつて、片袖の山は茶になりますから、袖下は黑になります。

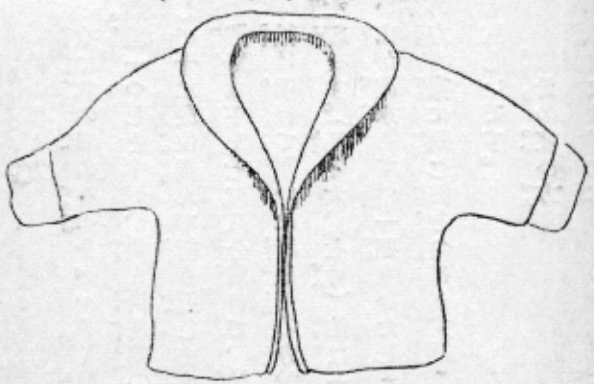
7　次には鎖を五十五編んで、六つ戻つた處から本圖のやうに、長編を九つ鎖一つして一目飛んだ處へ長編一、鎖一つした一目飛んだ處から又長編九つを作つて行くと、長編が九つ、鎖一、長編一で終りますから、其の通りにあと三段編んで、次には鎖五つしてから、長編一、鎖一を一目おき

に編んで、次の段も同様にして、編み戻つて、又前のやうに九つの長編をします。

8　かやうにして六段一組の物が三つ出來ましたら、片方に三十六目増し、三つ戻つた處から、長編を九つして鎖一、一つ飛んで長編一、鎖一をしますと前段と揃ひますから、九つの分を五つとして、六回目のときに長編七つ出來たら、其の先は止めて次の段に移ります。この模様を三段一十八段一で止め、袖のふやし目を前と反對に作つたものを編んで、前に綴ぢて置いた四角の前の方へ、綴ぢ合せて、後も之と同じ編方で、鎖百二十四をして、前の時のやうに編むと九つ長編が出來ます。模様を三段作つてから、兩端に三十六目づゝ増して、尙模様二段して三段目のときは肩の三角に合せて、斜に止めて行きます。後も四角の方に綴ぢつけましたら、袖下から眼を合せ、裾の飾は、各々の花の辨の二つづゝ十個共綴ぢて輪として、其の隣の花辨を二つづゝを、スエーターの裾へ平均する様に綴ぢつけます。

第二八　子供ジヤケツ

第十四圖（子供ジヤケツ）



材料　白太五オンス。
編針　鈎針一號。

最初に五十の鎖編をして短編を一つ、鎖編を一つして、一段を編みます。

次には前後の鎖編の中へ短編を入れ、短編の所へ鎖編を入れますと、短編と鎖編とが互違になります。そしてこの通りにして、五、六寸編みますと巾より丈の方が少し長い位になります。これが後身頃となります。

次に其所から三つに分けて初め三分の一だけを矢張り今迄通りの編方で後身と同じ丈編ます、其れから又肩の方から眞中三分の一を明けて置いて端の方の三分の一を先と同じやうに編ますと一つ

身の身頃を切つた時のやうな形のものが出來ます。

衿の作り方

次に其の形の全體をグル〳〵編んで、初め前身の下から矢張り同じ樣に、短編一つ鎖編一つしますが、角と衿肩明の所の兩隅とは一つ穴へ二つづゝ入れます。かやうにして十二段位編んで折り返します。其れを肩から眞二つに折つて脇縫をします。

脇縫は下を七、八分明けて、袖附も四、五寸明けて、中を縫ひます。

袖は明けて置いた所を下の方から編初めて、矢張り同じ編方でグル〳〵まはつて袖丈編ます。(凡そ六、七寸)飾は一つの所に長鎖を四つ入れて、二つ目に止めると小さい山が出來ます。一廻りいたしましたら袖の先を上向に返して置きます。そして身頃の方も裾に同じ飾をつけます。このジャケツは衿と袖口とを別色の絲を使つて編んでも宜しいです。

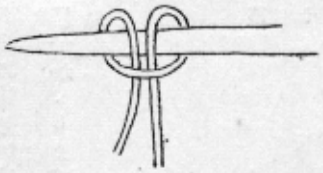
棒針の使ひ方

棒針には、二本のものと、四本で編む針と玉附のものと玉のつかないものとありま

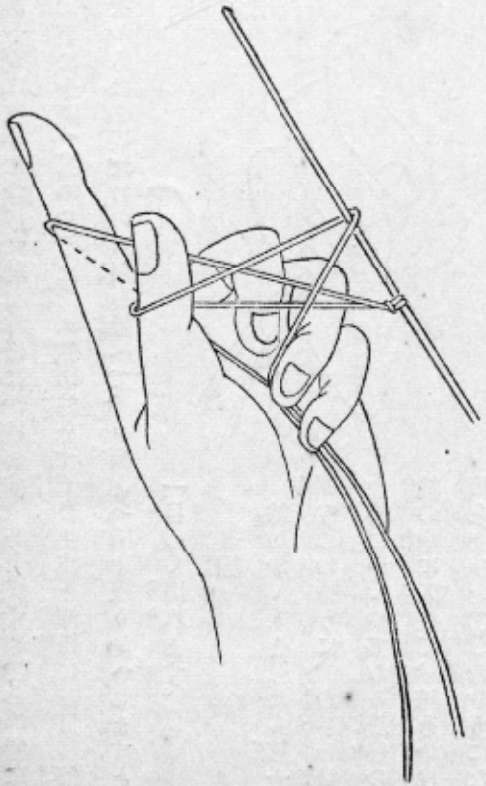
すが、其の初めの編方は、どちらも同じであります。そして棒針の編方は、表編と裏編ですから、其の基礎の方から說明いたします。

絲のかけ方

第十圖(イ)

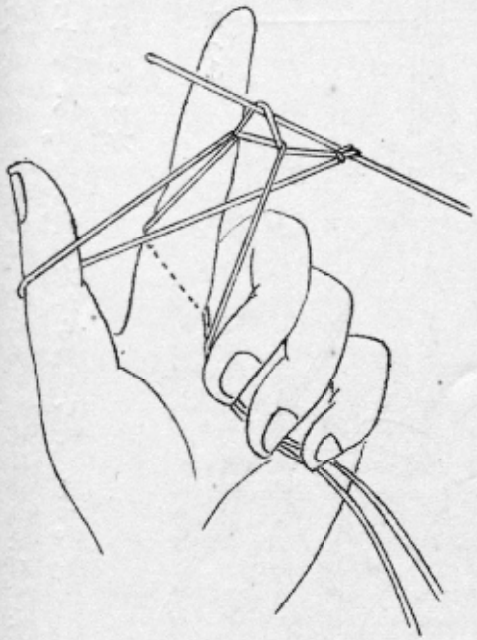


第十圖(ロ)



先づ十圖の(イ)のやうに左手にかけた絲を棒針にかけます。そして十圖(ロ)の樣に手前の絲をかけて、更に十圖(ハ)のやうに向ふ側の絲をすくひますと棒針に三目の針目がかゝります。次からは必要だけの目數を數へて、ロ圖とハ圖を操りかへしますと一目づゝ出來ます。

第十圖(ハ)



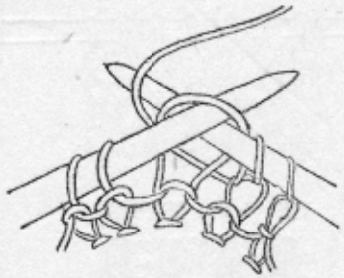
表編

絲がかゝりましたら第十圖(イ)のやうに、右手の針を棒にかゝつてゐる針目の輪の中に入れて、絲をかけ出しますと(ロ)のやうになります。

裏編

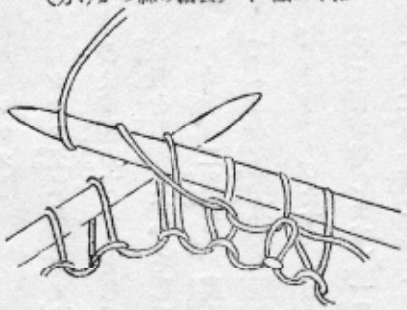
絲は表編も同じ樣にかけて第十二圖(イ)の樣に棒針も手前にし掛け絲を手前から出して、向ふ側にかけます、そして其れを繰りかへしますと(ロ)の樣になります。

第十一圖 イ (表編の絲のかけ方)

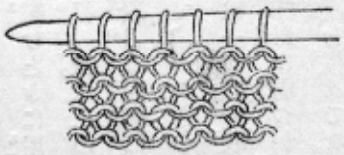


第十一圖 ロ (表編)

第十二圖 イ (裏編の絲のかけ方)



第十二圖 ロ (裏編)

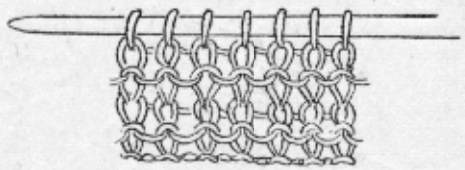


ガーター編

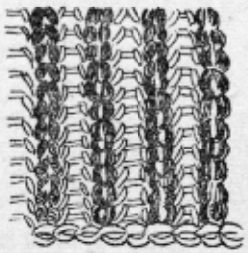
この編方は大變浮山應用されるものでありまして、其の編方は、表編を一段して端

迄編ましたら、持ちかへて、今度は裏編を一段いたします。この様に表編と裏編とを一段置きにする編方をガーター編と申します。

第十三圖（ガーター編）



第十四圖（シャツ編）

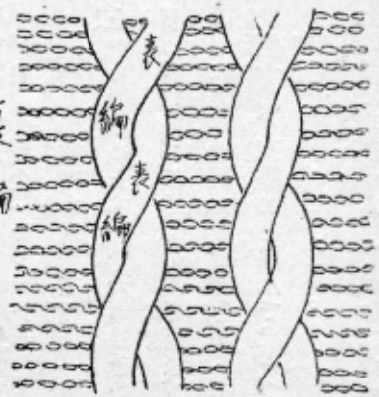


シャツ編

シャツ又はジャケツ等を編むときに用ひます編方でありまして、目の數は三の倍數を取ります、そして一段目は表編ばかりを、二段目は、裏返して、一つとつて（どんな編方でも編初めは一つ必ず取ります）かけます。（右手の棒針に引つかけて目が增します）一目表編を編んで次には二目一所にします（これで一つ目が減じて元の目數となります）この様にして、一つかけて、二つ一所にして端迄編んで參ります。次の段は裏返して、矢張り同

じやうに掛けて、一つ表編をして、二目一所にして編むことを繰りかへします。

第十五圖（縄編）



縄編

目數は六目で一模樣となります。

一段目は裏編四つ、表編六つ、裏編四つ、この數を繰り返して行きます。

二段目は表編四目裏編六目表編四目に編ます。

三段目は一段目と同じです。四段目は二段目と同じです。

五段目は一段目と同じです。

六段目は二段目と同じです。

七段目は裏編四目を編んで、次に表編六目の内、三目を別の針に移して、初めの裏編に續いて先の三目を表編にして、次に別の針に移した三目を續けて編ます。これで

六目の表編のうち三目は前後入れ違ひになつて、丁度繩のやうに編めるのであります。簡單で面白い編方であります。

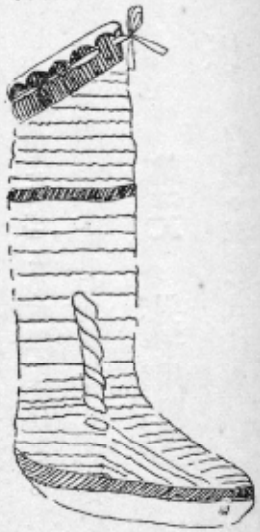
第二九　子供の長靴下（藤編）（一、二歳用）

材料　中細白一オンス。水色中細少々。
編棒　竹棒四本針　三號　一組。

上から編初めます。十六の目をかけて表編一段編まして、こゝから一段毎に兩端で一目づゝ增して四十六の目數編ますと、上の三角形のところが出來ます。其れから增減なしに九段程編んで、絲をかへて、模樣（藤編）を入れます。先づ一段目は、表編十四、裏編二を編んで、一つかけて表編六つ裏編二つかけて表編六つ、裏編二つ、表編十四をいたします。

二段目は表編十六、裏編を二つ一所に、裏編八、裏編を二つ一所、表編二、裏編を二つ一所に、裏編八、裏編を二つ一所に、表編十六をします。

第十六圖　（子供靴下）



三段編は表編十四、裏編二、表編を二つ一所に、表編六つ、表編二つ一所に、裏編二つ、表編十四をいたします。

四段目は表編十六、裏編を二つ一所に、裏編を四つ、裏編を二つ一所に、模樣の一つが出來ます。このやうに一段から四段まで二寸五六分編ます。

次に目數を三分して、一の針に十六、二の針に模樣の部分の十四を、三の針に殘りの十六を取ります。これを兩端の十六づゝの針を殘して、十四の目數の模樣の部分丈を模樣を續けて二寸程編ます。

そしてこゝで絲を切つて、表から先に殘した十六の目につゞいて、今編んだ模樣編の横の目をひろつて、先の目に續けて編ます。こゝから先は足の底になるのでありま

す。そしてこの部分は表編で五段編ましたら先で二目を二ケ所を、兩端で一目づゝと減じながら又五段編んで、裏に返して眞二つに折つて二重に留めます。

紐通しの編方

編初めの三角になつた所の目を水色の絲で一目づゝひろひますと、四十六目出來ます。これを表編で二段編んで、次の段では紐通しの爲めに、三目編んで、かけて二つ一所に、又三目編んで二つ一所にして、この段を終ります。そして其の上に更に、二三段編んで止めます。全部編めましたら縫合せて、上部の紐通しの所は鎖編を三つして二つとばして底から爪先迄縫ひ合せます。

そして紐通しにはゴムの打紐を附けます。

又この藤繩の部分を先に説明いたしました、繩編にしても宜しいです。

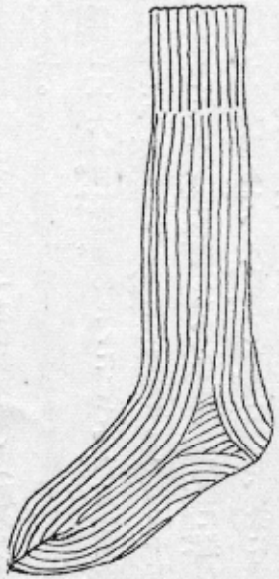
第三十　男子用靴下

材料　スコッチ五オンス。

材料　竹製四本針二號　一組。

先づ目數六十を作つて、これを三本の針に二十目づゝ掛けて輪にします、そして表編二つ裏編二つを繰りかへします、これをゴム編といひます。そして之を二寸位編ます。其れから表編ばかりを三寸位編んで、其れから、少し細くするために目數を減じます。針の二本を定めて針の終りの目三目を殘して、二つを一所にしますと、其の針の目數は一つです、次の針は一目編んで、二目を一所にして全部普通に編ます、これでこの段では二目減じたことになります。其れから十段目迄は增減なしに編んで、十一段目の先と同じ針目の所で、今減じたと同じ方法で又二つ目を減じます、かやうにして都合四回いたしますと八目減じたことになります。

第十七圖（男子用靴下）



次に其のまゝ七八分編んで其れから踵を作ります。

踵の作り方

今減じた目の所を踵の中心として目を丁度半分に割りますと一本の針目に二十六の目數がかゝります。其の一本は其のまゝ（踵の方は）一本は目數を二本の針に分けて置きます。

踵は二十六の目數を其のまゝにして、表編を一段裏返して、裏編を一段これを繰り返しますと、表編ばかり表になります。これを十五段位編ます。次の段では表編の側から初めて、十八目を編んで、八目殘して後に返し、裏側から最初の一目を取つて、次から十目を編んで、八目殘して後に返し、次に十九目を編んで七目殘して返し、こゝでも七目殘して返し、次は六目づゝ其の次は五目づゝと、此樣にして、兩端の目が全部なくなるまで編ますと、眞中に二十六目集まります、之を十三目づゝに分けますそして分けた一方の針で横の目を表面からひろひますと、約六十目位となります。次に先に殘して置いた十三目づゝの針を一本に集めて編んで、次に今一方の横の目を拾

ひます。此の時に針の分け目を同じになるやうに氣をつけて置きませんと、踵がゆがんで來ます。

次には先に拾つた目の終りでいつも二つ一所に一度編んで、次の針は全部編み次の針、即ち後で拾つた目をかけてある針の編初めでかぶせ目へ二つ目の目を一つ編んで先に殘した一つの目を今編んだ目の上にかぶせます。いつもこの樣にして初めの針の終りと、三本目の針の初めとの二ケ所で一目づゝ減じますと、出來上り圖のやうに踵の所に三角が出來ます。そして全體の目數が五十二となりましたら、足の大きさに合せて其れから先を一寸七、八分——二寸グル〳〵足の裏の部分と、足の踵の部分を輪にして編ます。それから爪尖を致します。

爪先の減し方。

爪先の兩側を中心として、足の甲に二十六目と裏側に二十六目をかけます。そして其の分け目の四隅で一目づゝ減じます。此の時は編初めの方では一目編んでかぶせ目で減じ、終りの方は三目殘して二目一度に編ます、かやうにして、一段おきに十目づ

、殘るまで減じます。

止め方。

三寸位殘して絲を切つて、縫針に通して、次に裏目から、先の針の目に通して、表の次の目に通して、其れを又裏から手前の針に通して、この樣にして先の二目、手前の二目とを順々に通して全部縫ひ合せます。そして最後の絲は裏面でよく止めておきます。

第三一　袋物のこさへ方

名刺入、楊子入、巾着、蟇口、紙入、財布、鏡入、手提袋、箱迫、など其他品物を入れる爲に、布類や皮類や紙などの加工したもので拵へた袋類を袋物と申します。

袋物は人として缺く事の出來ぬ實用品でございます。又手提などは實用と裝飾とを兼ねた物でありまして、人と生れて袋物を持たぬものは無いのでございませう。先づ赤ちやんには守巾着を腰に下げてやります。ヨチヨチと歩む位になり、四五歳頃にな

りますと、女の兒などは人形の付いた袋や、口金などの附いた愛らしい手提を玩具の樣に持つて、嬉しがつて居ます。小學校に通ふ頃になりますと、お金を入れる物が必要になりますから、蟇口に紐をつけて、首又は帶に下げるなどして、落さぬ樣に持たせます。次第に大きくなりますと、手提も蟇口も鏡入も、と云つた樣に、一人で三つも持つてゐる人もあります。又老人はお寺詣りに、珠數の入つた袋を下げるなど、老人も子供も男も女も袋物を持たぬ人はありません。實に需要の多い物でございます。

商店にあるものを見ますと、之を拵へます事は甚だ困難なやうに思ひますが、其拵へる方法を知れば、誰にでも出來ます。そして大きさや形などは、自分の好みにまかせて、色々工夫して拵へることが出來ますから。之を習ひ覺へて、一家の人々の必要な袋物は、有り合せの布で、拵へる樣に致しますと、一家の經濟の上に於てもよろしうございます。又丈夫で保ちも長いし其上趣味としても高尚で、面白い物でございます。

◇袋物の用具

一、裁板　大さは隨意でございますが、幅九寸、丈一尺三寸、厚さ一寸以上の朴の木で作つたものがよろしうございます。其用途は、裁ち方、貼り方、仕上げなどを總てこの板の上で致します。

二、裁ち庖丁　一名角庖丁ともいひ、型紙、用布、其他總ての裁物の時用ひます。

三、尺度　鯨尺、曲尺、メートル尺等のうち何でも差支へはありませんが之れまでの習慣上曲尺を用ひて說明致します。

四、長定木　赤樫で作りました幅一寸三分、長さ一尺三寸、厚さ二分位の細長い物で物を裁つ時の定木に致します。

五、糊板　糊を練る臺に用ひますので、寸法や本質は隨意でございます。

六、糊篦　糊を練つたり、用布や型紙其他の物に糊をつける時に用ひるもので粘た竹で作つたものが宜しうございます。

七、鏝　型紙を用布に貼りつけた時や、縫目を折つた時に用ひまして鋼鐵の兩磨きが最も宜しうございます。

八、目打錐　大小二種ございますが何れも端まで丸く尖つた細い錐で線を引く時折り返しの時、角を正す時、縫目を揃へて仕上げをする時、また型紙に穴を明ける時、小馳を打つ時、用布に穴を明ける時等に使用致します。

九、大黑槌　樫の木で作つた小さい槌で、縫ひ目の折をしつかりとつける時や、ホックを打つ時に用ひます。

一〇、鐵鎚　一名とんかちともいひ鐵で作つた小さい鎚で、小馳其他の金具を打つて平にする時に使用致します。

一一、喰切り　小さい釘拔に刄をつけた樣な形の物で、小馳の足等の金を切る時に用ひます。

一二、輕便ホック打　赤樫で作つた丸棒の尖端を丸く凹めた物で、其の棒の長さは三寸五分、丸さは直徑六分で凹の形は皿形に凹んだ物との直徑二分、深さ三分位に凹んだものと二種あります。ホックを打ち付ける時に。其ホックが潰れぬ樣に此凹みの穴を上から當てて槌で叩くのに用ひます。

一三、鳩目抜　尖端の方に至るほど細くなつた卷煎餅に柄をつけた樣な格好の鋼鐵で作つたもので、その穴の尖端の緣に刄が付けてございます。而して大小の二種ありまして、大の鳩目抜の方は、其丸穴の直徑が一分五厘で、小の方は五厘で、何れも用布に穴を明ける時に用ひます。

一四、鉛臺　鉛で作つた幅一寸、丈一寸五分、厚さ五分位のもので、鳩目抜で、布に穴を明ける時に、用布の下に敷く臺に致します。

一五、口金入　鋼鐵で作つたもので、其先が大きく丸く半に開き、それに丸い木の柄がついてゐます。墓口やバックの口金をつける時使ひます。

◇袋物の材料

一、用布　用布の品質はその人の好みによつて、如何樣布地を用ひても宜しうございますが、鏝をかけた時または僅かな濕りのために縮んだりするものは避けねばなりません。

二、皮　色々の種類がありますが、なめし皮、鹿皮、銀付のへがし皮等用ゐます。

三、縫ひ絲　縫ひ絲は主として絹絲を用ひます。木綿絲や人絹等は絹絲と違つて締めが弱く、直ぐに切れがちでございますから、なるべく用ひないが宜しいと思ひます。

四、型紙　型紙は用布に貼るものと、芯紙用のものと二種あります。

即ち(イ)生判紙、生漉きの日本紙で、總て用布に貼る型紙に用ひます。(ロ)張子紙、漉き返し(淺草紙)の樣な紙で地の厚いものと地の薄いものと凡そ十五種ばかりありまして、一々番號で區別され、一番張子紙よりも二番張子紙の方が厚く、二より三、三より四番張子紙の方が厚いといふ樣に、その番號順に、次第に厚くなります。之は主として芯紙に使用し普通三より八までの間を用ひます。然し場合に依つては用布に貼る型紙とすることもあります。(ハ)大判紙、張子紙に似た稍々地の薄い質の脆い紙でこれは場合に依つて芯紙または型紙に用ひます。(ニ)板目紙半紙の板目紙で帳簿の表紙の樣な厚紙で、五枚張り以上十枚貼り位までの物を芯紙にすることがございます。

五、竹紙　竹の皮を薄く漉つて製し、その裏に紙を貼つたもので、濡れものを入れる袋をこしらへる場合に貼ります。

六、經木　木を極めて薄く板に削つたもので、襠等の芯に用ひます。

七、糊　盤石糊と姫糊との二種を用ひます。而して盤石糊は紙入、煙草入、その他の口を貼る時や、蟇口、或はバック等の口金を付ける場合に用ひ、姫糊は主として型紙を用布に貼りつける時に使用するのでございます。其他、蟇口用やバック用の口金ホック、小馳、護謨テップ、打ち紐、底鋲などが要りますが、それ等はすべて使用する時に説明することに致します。

第三一　名刺入

皿刳り名刺入は、名刺を横にして入れる、幅の廣い袋で、前を皿形に刳つたものでございます。

〔材料〕名刺入は中に入れる名刺の大きさによつて丈の寸法も幅の寸法も割り出します。用布の寸法の割り出し方、表用布の幅は名刺の丈より六分廣く丈は名刺の幅の二倍に八分加へた物、裏用布は幅は表用布と同寸法に裁ち丈を一分五厘短かく致します。

説明の都合上幅一寸五分丈二寸七分の大さの名刺を入れる名刺入を拵へることに致します。そしてこれに要する材料は次ぎの通りでございます。

表用布　幅六つ割(大幅を六つに割つた幅を云ふ)のものを丈三寸八分。

裏用布　幅六つ割のものを丈六分五厘、他に七番張子紙と生判紙を少々で。

名刺入出來上り圖

拵へる順序

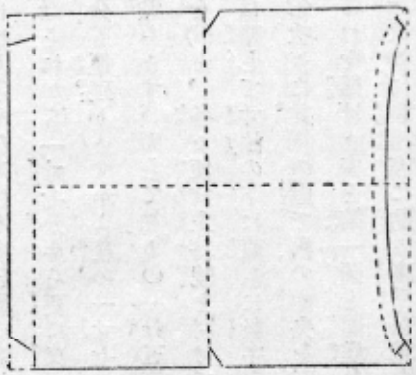
〔裁ち方〕(一)先づ表型紙から裁ちます。表型紙とは表用布に貼りつける型紙の事を申します。此名刺入の表型は丈三寸八分(名刺の幅の二倍に八分加へたもの)幅三寸三分(名刺の丈に六分加へたもの)の物でございます。その裁ち型は、生判紙を裁ち板の上に縦に置き、最初にその右の端から一分程這入つた所へ眞直ぐに定木を當てそれを動かない樣に左の手でしつかり抑へ右の手で裁ち庖丁を胴握りに持つて定木の右緣に庖丁の刄を着け、向ふから手前の方へ引き

乍ら裁ちます（以下裁ち型はこれに同じ）これで右横だけは眞直に裁ち終りましたから次ぎに定木を左の方へずらせ右の手で尺度を持ち今裁ちました右端から必要な幅の寸法三寸三分に計り其處へ定木を當ててそれを左の手でしつかりと抑へ定木の右縁を前と同じ仕方で眞直に裁ちます。

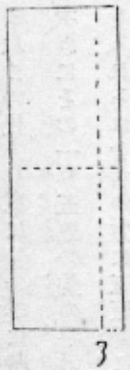
（二）次ぎにその三寸三分の幅を表を中にして正しく二つに折り、輪の方を手前に兩横の裁ち目の二枚重なつた方を向ふに丈の兩端を左右にして裁板の上に置きます。そして丈の兩端はまだ裁ち揃へてありませんので不揃になつてゐますからそれを揃へる爲に丈の右の端から兩横の裁ち目の二枚重なつた方で眞直に一分の深さの切り込みを入れます。斯う致しますと幅の兩横へ同時に切り込みがつきますから、それを擴げ切り込みが定木の右縁に行く樣に定木を當て左の手で抑へながらその間を裁ちます。次ぎにこの右の端を裁つた紙を元の通りに幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ兩横の裁ち目の二枚重なつた方で今裁ち揃へた丈の端から三寸八分のところに切り込みを入れ前と同じ仕方で不用の紙を裁ち捨てます。すべて何れの時でも幅の兩横と丈の兩端を

裁つ場合にはこの樣にして裁ちます。これで幅三寸三分、丈三寸八分の正しい形に生判紙が裁ち上りましたから次ぎに縫ふ時の便利を計つて要所々々に切り込みを入れます。

第一圖　表紙型



第二圖　裏紙型



（三）幅を正しく二つに折つて、前の樣に輪の方を手前に裁ち目の二枚重つた方を向ふに丈の兩端を左右にして裁ち板の上に置き兩端の裁ち目の二枚重なつた方で丈の右の端から一分五厘の處に二分の深さの切り込みを入れ丈の右の端で二分五厘の深さになる樣に其處を鈎の手に裁ち落します。（これが反對に左の端で鈎の手になる事もありますが何れにしても

これからはこの仕方を單に鈎の手に裁ちます）といふ事に致します。

（四）次ぎにその一分五厘の鈎の手の所から一寸七分の所に五厘の深さに眞直ぐに切り込みを入れそれを右の方に五厘斜に曲げて三角に裁ち落します。これから斯うして三角に切り込みを入れる事を單に切り込みを入れるといつて置きます。

（五）それから一寸七分から更に又一寸七分の所に切り込みを入れますと左の端の方で二分五厘殘りますから後の一寸七分の切り込みの處からその左の端二分五厘を鈎の手に裁ちます。而して初めの一分五厘を(1)とし、次の一寸七分を(2)とし、最後の一寸七分を(3)と、各々便宜上符號を付けて置きます（これからは斯うした符號を付ける場合には略して寸法の下に直ちに數字を書き入れることに致します。

（六）次ぎに其(1)の處で幅の中央を三分の深さにして、兩横へ皿形に恰好よく刳ります。これを擴げますと第一圖と同樣な表型が出來上ります。

（七）次ぎに裏用布に貼る裏型を裁ちます。裏型紙は幅三寸、丈一寸に生判紙を裁ち例の如く幅を二つ折りにして丈の右の端から二分(3)の所に切り込みを入れ其處を鈎の

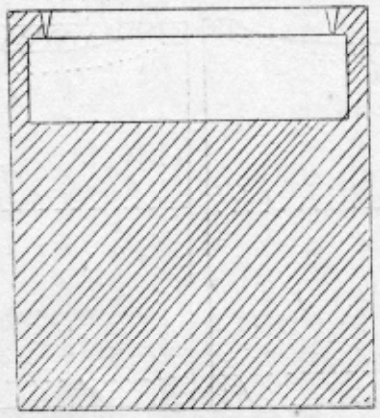
手に裁ちます。而してこれを擴げますと第二圖と同樣な裏型が出來ます。

（八）次ぎに七番張子紙三寸、丈一寸六分五厘の寸法で芯紙を一枚裁つて置きます。

以上で全部裁ち終りましたから、表と裏との型紙を用布に貼ります。

第三圖

裏用布ニ型紙ニ貼リ込む

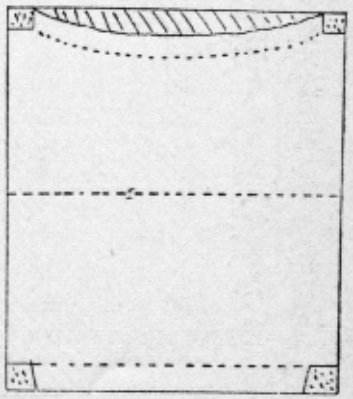


〔張り方〕（一）表型紙の表側の周圍に縁糊をつけ、（紙の端に三厘位の幅に糊を附けることを縁糊といふ）表布の裏側に載せて、兩横を平に貼つて型紙の方から鏝を掛け、丈の兩端は表に袋を取つて（表布が型紙よりも少したる位にする事）貼りつけます。

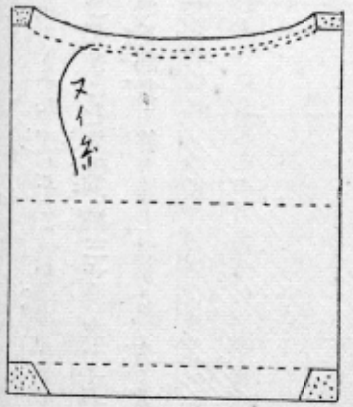
（二）次ぎに裏型紙にも、表型紙と同じやうに糊をつけ第三圖の樣に平に貼ります。この時型紙は用布よりも三分狹くなつてゐますから一分五厘づゝ兩横へ用布を殘します。

（三）表と裏と貼り終りましたら、表用布を型紙通りに切ります。しかし鈎の手や切

第四圖
皿刳りなり表と裏と貼り合す



第五圖
皿刳りなり表裏縫ひ合す



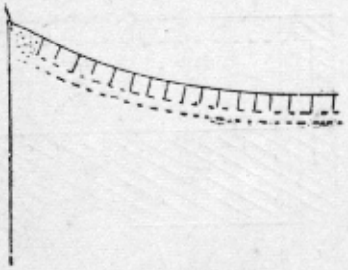
込みのところは用布を切りませんで殘しておきます。裏は型紙の兩横に一分五厘づゝ用布を殘して、三寸三分の幅に裁ち裁ち目にほづれぬ樣に縁糊をしておきます。

縫ひ方　(一)表裏の(1)(2)(3)の切り込みの所即ち第一圖の點線の所に定木を當てゝ鏝で筋を入れます。

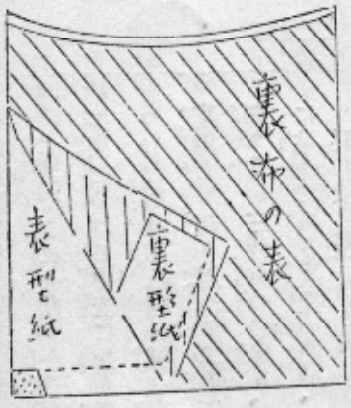
(二)皿形にくつてある表形の(1)の所に表布の方へ糊をつけ、裏用布の型紙を貼らない方の丈の端と重ねて中表に貼りますと、第四圖の皿刳りの上の所で裏用布は眞直ぐになつてゐますから、これを表に合せて裁ち捨てます(第五圖)而して一分の縫ひ代(筋より五厘

外側)で一針抜きに縫ひ、縫つた絲を切らない程度の深さで第六圖の樣に一分置きに眞直ぐに切り込みを入れ、五厘の折り代で(筋の所になります)表型の方へ貼りつけ第七圖の樣に外表に返して表用布を五厘袵かせて裏用布の方から鏝をかけます。此處は後に袋の口になる所でございます。

第六圖
縫代に切込みを入れる



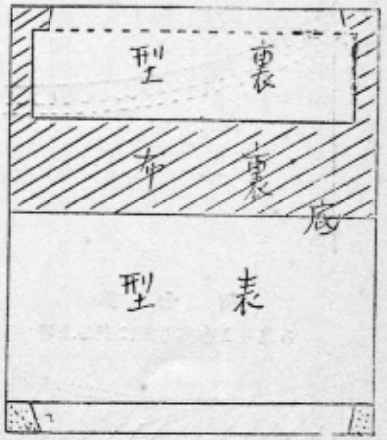
第七圖
同上を表に返し裏布より見る



(三)次ぎに表用布の方を下に、裏用布の方を上にして、皿刳りの所を向ふにして第七圖の樣に裁ち板の上に載せ、表型の(1)の筋から(2)の筋までの兩横の紙に糊をつけ、裏用布の方の幅を少し

第八圖

裏布を底より折返したる圖



つれ加減にして外表に貼ります。

(四)次ぎに今貼り合せた裏用布の兩横に糊をつけて中表に折り返して平に貼りつけた所は第八圖の樣に表用布が一枚と裏用布が折り返つて二重になつてゐます即ち布が三枚重つて居り、そして裏用布に貼つてある裏型の筋が、皿刻りの表型の筋の上に重なつて居ります。

(五)次ぎに裏型の筋の端に糊をつけて裏型の方へ貼りつけます。

(六)次ぎに表用布が上になる樣に裁ち板の上に置き換へ、兩横の(1)の筋から(2)の筋の間に糊をつけ、その(1)の筋と(3)の筋とが重なる樣に(2)の筋から中表に折り返して平に貼りますと、裏の(3)の筋と表の(1)(3)の筋とが正しく重つてゐます。

(七)以上で袋の大體の形に貼り上りましたから、その兩横を一分の縫ひ代で一針拔

き、或はミシンで縫ひます。(一針拔き或はミシンで縫ふことを『縫ひます』といふ事に致します)。而して裏用布から、縫ひ代を裏用布の方へ折つて叩いてよく折りくせをつけ、そして表に返します。

(八)その表に返した袋を、兩横がキチンと同じ寸法になる樣に目打又は篦で正しくし、そして前に裁つて置きました芯紙を裏用布との間に差し込みます。芯紙の差し込み方は先づ芯紙の兩横に各々一分幅で糊をつけ、その糊を兩横の縫ひ目につけて、表用布と兩横の縫ひ目の間へ入れるのでございます。(以下同方法でございますから芯紙を差込みます』と略します。

(九)次ぎに表用布の(3)の筋より端の二分五厘の用布でその芯紙と兩横の縫ひ目とを包んで目打錐の尖端で貼り、そして三厘袱かせて、裏用布と貼り合せ、裏用布の方から鏝をかけます。而してその芯紙を差込みました時に、芯紙が裏用布の丈よりも伸び出ますと、出來上りが見苦しくなりますから伸び出ない樣に、注意を要します。(以下同樣でございます)。

（一〇）これですつかり縫ひ上りましたから、霧を吹いた位の程度に濕した仕上げ布（糊の無い白木綿類）に暫く包んで置き、袋にうつすらと濕りが移つた頃を見（凡そ十五分間位）仕上げ布の中から取り出し、目打錐で角々をくつきりと出したり、縫ひ目の凸凹を鏝で直したり等致しまして、十分格好を正しくしてから、鏝をかけます。其時袋が汚れない樣に生判紙を一枚敷いて、其の上から鏝をかけます。

この方法を仕上げと云ひ、そして仕上げ布に包んで袋を濕しますのは、その濕りの爲に用布や芯紙がしなやかになり、形が整ひ易くなるからでございます。仕上がすみますと全く出來上つたのであります。

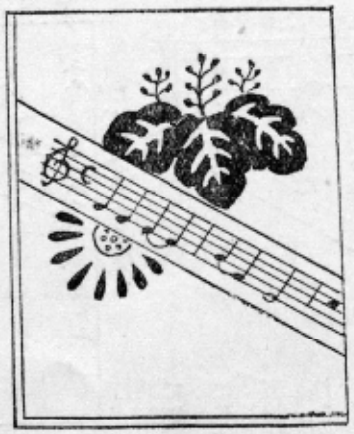
第三三　君が代銀貨入（二つ折）

君が代銀貨入は出來上り圖の樣に、君が代の音符を書き、其の上下に菊と桐との繪をあしらつた、高尚な銀貨入で裏側は深い口と淺い口と、二つ銀貨を入れる口が付いてをります。そして丈の中央から二つに折つて用ひます。

材料

表用布は幅六つ割（大幅を六等分した幅）の赤の鹽瀨を一尺一寸四分。同じ幅の白の鹽瀨を二寸八分。裏用布は幅六つ割。丈七寸九分（色と地質は隨意）西の内（紙）を一枚。

第一圖
出來上り圖



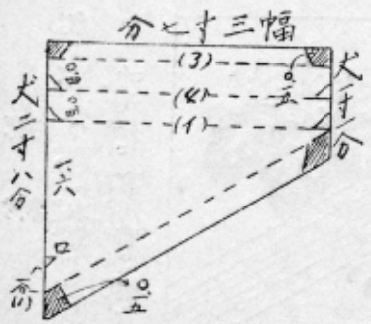
拵へ方

一、裁方

（一）西の内を幅三寸七分、丈七寸二分五厘に裁ち第二圖の樣に紙の表を裁板の面に付けて、縱に置き、右の横の向ふから一寸一分のところに標を付け、左横は向ふの端から二寸八分に標を付け、標と標に斜に定木を當てゝ裁ち庖丁で裁ち落します。此紙は君が代の音符を書くところの型紙で音符表の型紙と申します。次にその裁目の端から各々一寸一分の處に印をつけ、其印から印に向つて定木を當てゝ鉋丁で裁

第二圖
表型裁ち合せの

第三圖
金留表



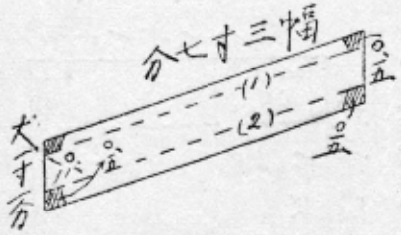
ち落します。こうして二枚の型紙と裁落した殘りの紙は、右横が五寸五厘、左横が三寸三分五厘あります。この紙を段口の表型と致します。

(二)次ぎに今裁ちました金留表の型紙を中表にして、丈の平な端と幅とを揃へて幅を二つに折り、丈の端の二枚揃つた方を右にして裁板の上にのせ丈の右の上の端から一分五厘(3)四分(4)四分(イ)の順に切り込みを入れこれを擴げて第三圖の樣に斜の端を手前にし、丈の長い方を左にして縦に置き、左横の(イ)の切り込みから一寸六分、(ロ)一分(1)の順に切り込みを入れ初めの一分五厘(3)の端を右横の(イ)の

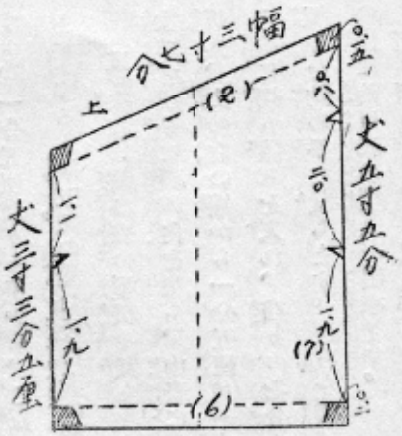
切り込みを左横の殘りの一分五厘とを鈎の手に裁ちますと、圖の樣に金留表の型紙が出來ます。

(三)次ぎに音符の表になる紙を、第四圖の樣に斜に上つた方を右に、下つた方を左にして裁板にのせ、兩横とも斜の向の端から一分五厘(1)八分(2)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘と始めの一分五厘とを鈎の手に裁ちますと、第四圖の樣に音符表型が出來ます。

第四圖
音譜表



第五圖
段口表

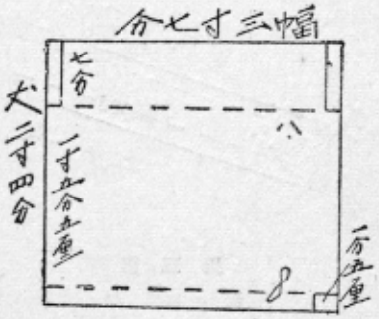


(四)次ぎに段口表の型紙を丈の一方の端の平なところを手前にして、斜の方を向ふ

にして裁板にのせ、平の端から二分(6)一寸九分(7)の切り込みを入れ、丈の長い方の横に二寸(ロ)八分の順に切り込みを入れ、左の短かい横は一寸一分に切り込みを入れます。すると、一分五厘殘りますから、これを鈎の手に裁ちます。すると第五圖の樣な段口表の型紙が出來ます。

第六圖

前口表型



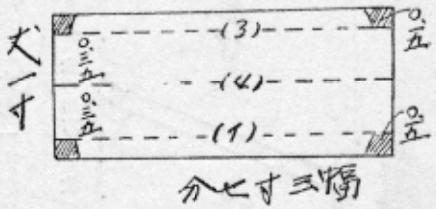
(五)次ぎに前口表の型紙を裁ちます。幅三寸七分丈二寸四分に西の内を裁ち、中表にして幅を二つに折り、丈の右の端から一分五厘(8)一寸五分五厘(八)の順に切り込みを入れ、殘りの七分と初めの一分五厘とを鈎の手に裁ちます。これを擴げますと第六圖の樣に前口表の型紙が出來ます。

(六)次ぎに金留裏型を裁ちます。幅三寸七分、丈一寸に西の内を裁ち中表に二つに折り右の端から一分五厘(3)三分五厘(4)三分五厘(イ)に切り込みを入れますと一分五厘殘りますから、初めの一分五厘と共に鈎の手に裁つて擴げますと、第七圖が出來上ります。

以上で型紙が全部裁ち上りましたから、次は用布に貼ります。

第七圖

金留裏型



二、貼り方

(一)先づ金留表型に緣糊をつけ(紙の表の方に以下同じ)型紙の上の端と丈一尺一寸四分の赤の表の端とを重ねて載せ上を殘して三方を平に貼つて鏝をかけ上の端は表に袋取つて貼ります。

(二)次ぎに段口表型に緣糊をつけ、上の端と金留表の下の端とを突き合せて同じ用布に載せ周圍を平に貼ります。

(三)次ぎに前口裏型に緣糊をつけ殘りの用布の丈の一方の端と型紙の一分五厘の鈎の手の端とを揃へ、段口表型との間へ用布を殘して周圍を平に貼ります。

(四)次ぎに音譜表型に緣糊をつけ丈二寸八分の白の表用布の上に布目が曲らない樣

に載せて周圍を平に貼つて鏝をかけます。

(五)次ぎに金留裏型の兩横と、一分五厘(3)の鈎の手の端に緣糊をつけ、丈七寸九分の裏用布の丈の一方の端と一分五厘(3)の鈎の手の端とを揃へて、平に貼つて鏝をかけます。

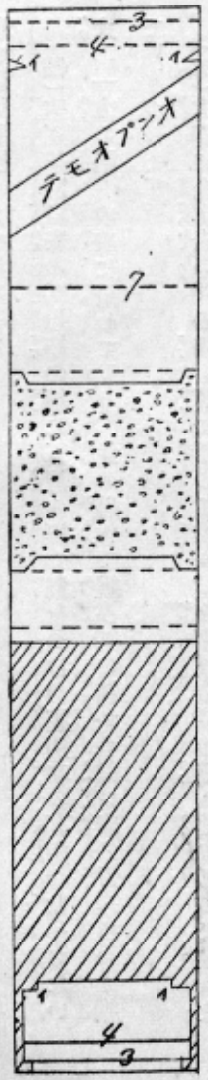
第八圖　赤の用布に三枚の型紙を貼り合せの圖

かうして全部貼り上りましたから金留表と音譜表とを型紙通りに裁ち切り段口表とは前口とは型紙と型紙との間へ用布を續けたまゝ兩横の幅を型紙に合せて裁ち金留裏は幅三寸七分にして眞直に兩横を裁つて置き周圍のほづれを防ぐために緣糊をしておきます。

三、縫ひ方

(一)先づ金留表の(3)(4)(イ)音譜表の(1)(2)段口表の(2)(7)(6)前口表の(8)金留裏の(3)(4)の

第九圖



切り込みに、各々筋鏝で筋を入れます。そして切り込みと切り込みとが斜の位置にありますのは、斜になつたまゝ定木を入れて筋を入れるのであります。

(二)次ぎに金留表の(イ)の筋の端に緣糊をつけ、音譜表の(1)の筋と(1)と(1)とを中表

に重ねて貼りつけ、普通の縫代で縫つておきます。

(三)次ぎに音譜表の(2)の筋の端に縁糊をつけ、段口表の(2)の筋と(2)と(2)とを中表に重ねて貼りつけ普通の縫代で縫ひます。そして(1)の筋も(2)の筋も音譜表の方に折つて糊で貼り鏝をかけます。

(四)次ぎに前口表の(8)の筋の端に五厘の幅で糊をつけ、裏用布の裏型の貼つてない丈の一方の端と中表に重ねて貼り、並の縫代で縫ひ(8)の筋から前口表の方へ折つて糊で貼りつけます。

(五)次ぎに金留表の(3)の筋を裏に折つて貼り、金留裏の(3)の筋も裏に折つて貼ります。

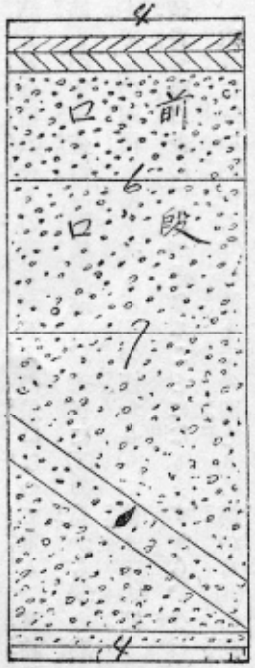
(六)次ぎに金留表の(3)の筋から(4)の筋までの布表の兩横に縁糊をつけ、(4)の筋から折つて(イ)と(3)との筋を中表に重ねて兩横を平に貼ります。

(七)次ぎに(8)の筋の縫ひ代を前口表の方に折つて貼り外表に返して表用布を五厘袵かせて鏝をかけます。そして裏用布の型紙の方を裁板の上につけて裏用布を向ふに、

表用布を手前にして縦にして載せ、前口表の(8)の筋を金留の(2)の筋から五厘離れた所に重なる様に裏用布を中表に折り返して兩横を縁糊で貼りつけます。すると裏用布で深口が出來て、其上に表用布が重つて居りますから、其兩横も深口の底まで貼り合せます。(この時裏用布を五厘づつ兩横でつらせて貼ります。)

第十圖

金留及び前口の上り貼圖



(九)次ぎに段口表型の(6)の筋の端の二分(型紙の面に)糊をつけ外表に貼りますと、型紙の(6)の筋の所が折り目になつて型紙のない用布ばかりの所と、段口型紙の貼つてある所とが外表になつて二枚重ねます。此の折り目の(6)の筋と前口表の(6)の筋と重ねて兩横を貼ります(この時は前口表を少し弛ませます)と其處に前口が出來ます。そして其間は表用布が三枚と裏用布が二枚重つて都合五枚の用布が重つて居ります。

(一〇)次ぎに金留表の(4)の筋から段口表の(7)の筋までの兩横に緣糊をつけて(7)の筋から中表に折つて貼りますと、前口と段口との上に金留表と音譜表とが重なり型紙の方が上になつて居ります。次ぎに金留表の(4)の筋と金留裏の(4)の筋とを重ね、且つ前口表の先きの(8)の筋と金留表の先きの(3)の筋とを正しく突き合せますと裏金留の先きの(3)の筋と表金留の先きの(3)とが五厘の差になつて重り、又前口表の(6)の筋と段口表の(6)の筋とが重り金留の兩横を貼り、次ぎに(7)の筋から(6)の筋までの間と(8)の筋から(6)の筋までとの兩横を貼り次ぎに(7)の筋から(6)の筋までの間と(8)の筋から(6)の筋とが重り金留表や段口表の(ロ)が重なることになりますから、先づ裏と裏との金留の兩横を貼り、次ぎに(7)の筋から(6)の筋までの間と(8)の筋から(6)の筋までとの兩横を平に貼ります。すると筋の所で一番上に重つてゐる表用布が五厘弛みますからその弛みを其處で縮せます。そして兩横を並の縫ひ代で縫ひ、裏用布の方から縫目の直ぐ内側に筋を入れ、その筋から裏の方へ折つて叩いてよく折り癖をつけ、金留の(4)の筋と(4)の筋との間から外表に返します。

(一一)次ぎに仕上げ筐や目打錐を中に入れて、兩横の縫ひ目の凸凹をよく正し金留表を外表に返してその表用布の方を五厘袵せて口を貼り合せます。

かやうにして全部出來上りましたから丁寧に仕上げをし段口を中にして(6)の筋から二つに折つて帶紙を致しておきます。

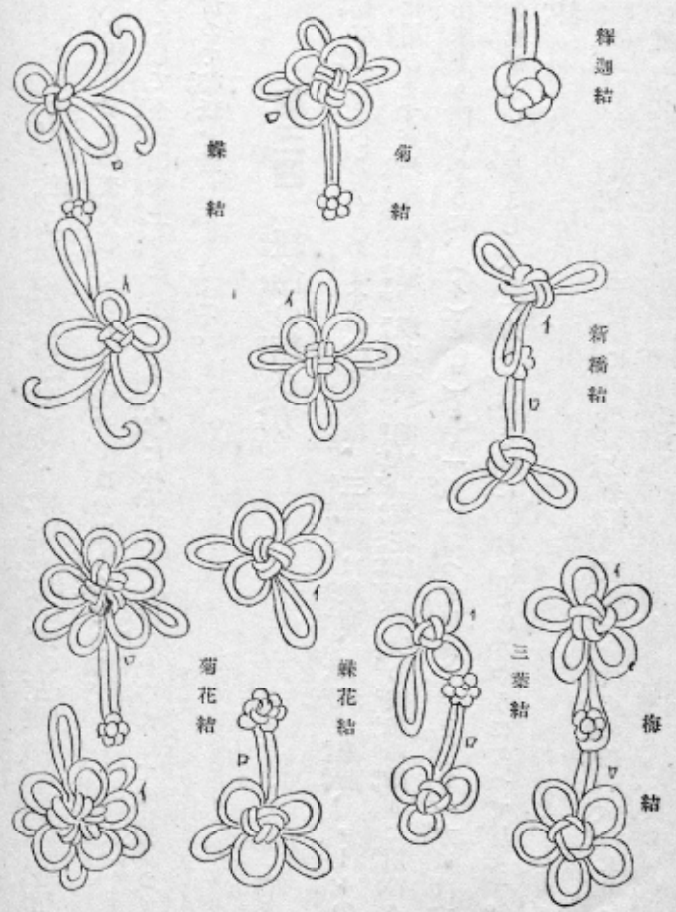
第三四　紐飾の結び方

此の結び方にはいろ〳〵あますが、新橋結、三葉結は被布、合羽、道行、コートの胸飾りに用ひます。梅結、蝶結、蝶花結、菊結、菊花結は子供の被布の飾りに用ひまして、出來上り圖のやうに、(イ)と(ロ)とで一組になつて居ます。そして一方にはすべて釋迦結がついて居まして、一方の輪をそれにかけてとめるやうになつて居ます。

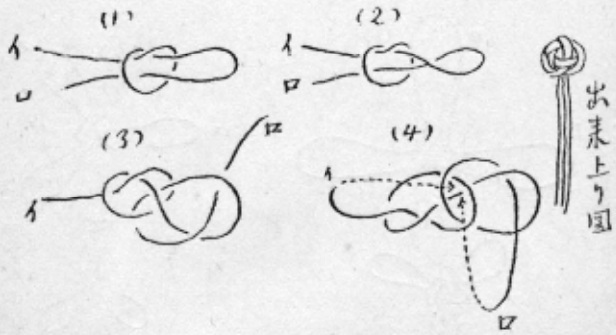
材料

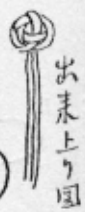
大人物のコートは共布を幅三分位に切り、之を新て直徑一分位の打紐の太さに作るか、又は絹か、瓦斯の打紐を使用いたします。

第一圖
出來上り飾紐



第二圖
釋迦結の結び方





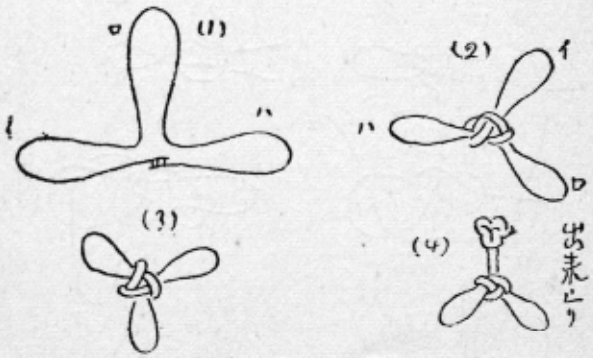
子供物は絹又は瓦斯の打紐を用ひます。色は赤、桃色等好みのものを使用いたします。

結び方

一、釋迦結　第二圖(1)の樣に結輪を作ります。そしてその輪を一つねじて(2)一方の端(ロ)を其中に入れますと(3)となります。これを裏返して(4)の通り、兩方の端(イ)と(ロ)を夫々矢の方向に輪の中に入れまして、小さく締めますと出來上り圖の樣になります。釋迦結一箇に對して紐の丈一寸五分を要します。

二、新橋結　四寸五分の紐の兩端を絲でかたく結んで圓く輪を作り、第三圖の樣にこれを三つの折山(2)にして、(2)の樣に(イ)を(ロ)の上に、(ロ)

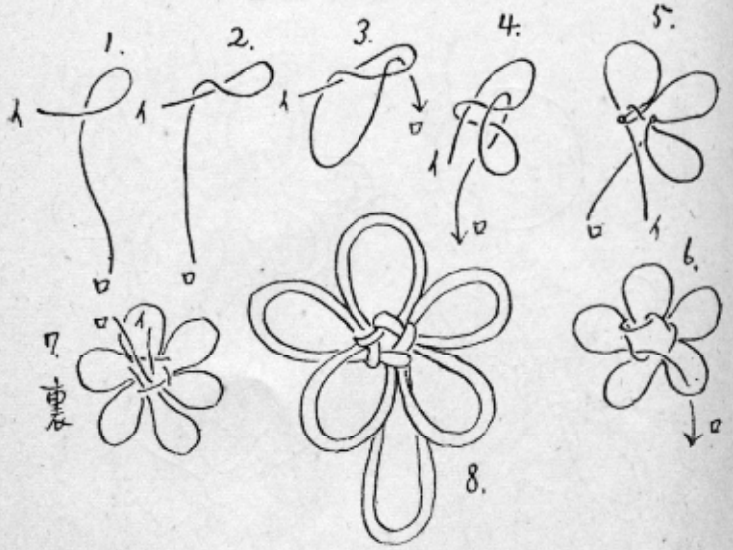
第三圖
新橋結の結び方



を(ハ)の上に(ハ)をはじめの(イ)の輪に入れますと(3)の出來上り圖になります。

三、梅結　紐一尺で第四圖の樣に(1)輪（第一の花瓣）を作り、それを一つねじて(2)一方の端(ロ)をその輪に入れますと、(3)の樣になります。次に(4)の樣に(ロ)の端を全部引き拔かないで、又一つ輪（第二の花瓣）を作ります。この方法(5)で（第三の花瓣）をつくり、第四の花瓣も同じ樣にして作ります。次に第五の花瓣は(ロ)の端を最初作りました第一の花瓣の根元の輪に入れて、第四の花瓣を通つてしめますと、(6)の五ッの花瓣が出來上ります。それから釋迦結にかける輪を作ります。その作り方は一と五の瓣の間に、それ等

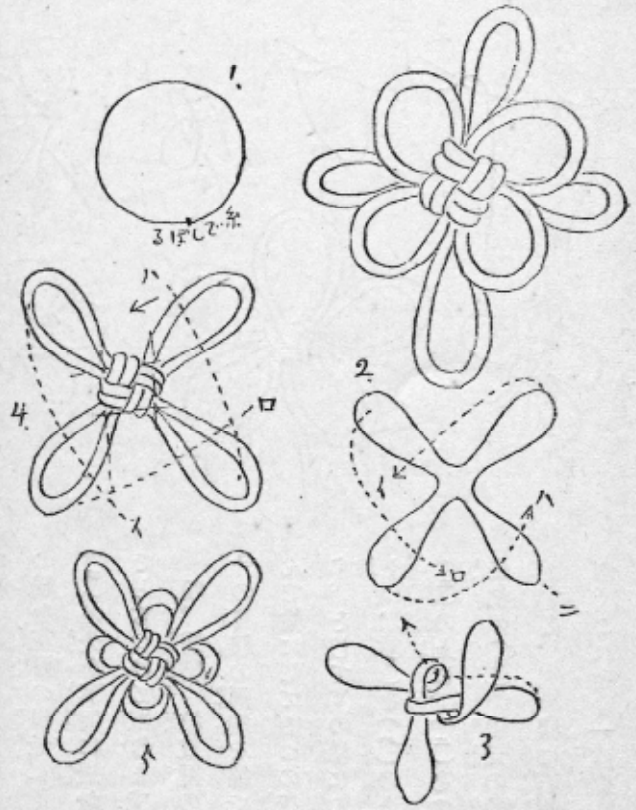
第四圖
梅結の結び方



の瓣より少し長い輪を作つて(ロ)の端を花瓣の根元に通して(イ)と(ロ)の先を裏側に短かくきつて絲でとぢつけて置きます。

四、菊結　第五圖の樣に一尺二寸の打紐の兩端を絲でかたくむすんで輪にして四つの折山を作ります。そして(2)の樣に(イ)を(ロ)の上に、(ロ)を(ハ)の上に、(ハ)を(ニ)の上に、(ニ)を(ハ)の上より最初の(イ)の根元の輪の中に入れますと、(4)の樣に石疊みになります。これを今一度繰り返しますと

第五圖
菊結の結び方



石疊が二つ重なつて、(5)の樣なものになりますから、小さい輪を引き出しまして、裏返しますと出來上り圖の樣になります

三葉結は六寸の紐で

出來上りますから圖の樣に輪を三つに、蝶結は一尺の紐で輪を四つにして、梅結と同じ方法にして作ります。

蝶花結は一尺で折山を三つ作り、菊花結は一尺四寸で折山を五つにいたしまして、菊結と同じ方法にして作ります。

出來上り圖で見えます樣に、釋迦結のついてゐる(ロ)と記してある方は、前に申しました寸法に一寸五分を加へたものを使用いたします。

第三五　進物の拵へ方

我が國は神代の時代から人に物を贈るに木の枝につるし、或は草木を折り添へるとか又は、藁や繩で束ねたりなどしたものだそうであります、現今でもなほ赤飯に南天の葉を載せるとか、鮮魚に笹の葉を添へるなど、風流な習慣が殘つて居りますが時代の進運につれて、こうした古風は次第にすたれて只品物を紙に包んで水引を掛けるやうになりました。

この紙や水引の種類、用途、其の包み方、結び方等に就て説明して見ませう。

包紙の種類

品物を包む紙には大高（奉書の少し厚いやうな紙を縮緬のやうに縮ませたもの）杉原、奉書、改良奉書、糊入、美濃紙、西の内、半紙、色紙（赤、金、銀）等があります。

包紙の數

婚禮に關する贈答品は二枚の紙を以て包みます。紙は大高、杉原、奉書の何れかの白を二枚用ひるか、又は白一枚、赤一枚を重ねて用ひます。

凶事に關する贈答品は一枚で、奉書以下の白紙を用ひます。

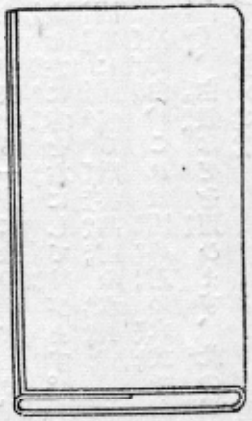
其の他の贈答品は改まつた場合は二枚、略式は一枚を用ひます。

紙を二枚又は一枚といふ事は、二重又は一重の意で、大きな品物の場合に紙一枚の大きさでは包み覆せぬ物は、二重を二枚、又は三枚用ひるか、一重を二枚又は三枚用ひる場合もあります。小さい物は一枚の紙を二つ折りにして包んでも差支ありません

包み方

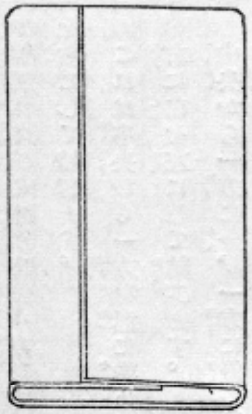
品物を二枚で包む場合は紙の表を外に裏を中にして重ねます、そうして品物を紙の上に載せ、紙の左を先に右を後から折りますこうすると紙の上の端は品物の左の端（第一圖）又は途中で左に向つて居ります。（第二圖）之れが祝儀や日常贈答品の包み方でありますが、凶事の場合にはこうして包んだものを、表書を書くときに逆にして書きます、そうすると包紙の端は右の端又は、途中で右に向つてゐます。

第一圖



包紙の端が左の端になる圖

第二圖



品物が大きな場合に包紙の端が途中で左に向つてゐる圖

水引の種類

祝儀及び日常贈答品用の水引

紅白、水引の中央から一方を、唇に附ける紅で染めたもので一方は白色をして居ります

これは最も本式の水引で宮中皇族方等の正式の場合にお用ひになります、紅を左に白を右にして結びます。

赤白　これは中央から一方を赤に染めたもので、民間で祝ひ事や普通の場合に用ひ、赤を右に白を左にして結びます。

金銀　中央から一方に金、一方に銀の紙を巻いたもので華やかな場合に用ひ、金を右銀を左にして結びます。

赤金　中央から一方に金の紙を巻き、一方を赤く染めたもので華やかな場合に用ひ、金を左に赤を右にして結びます。

凶事に關する贈答品用の水引

白　全部白、これは凶事用の本式でありますが、土地によつては全部黑、または白黑白黄、白銀などを用ひます、此の場合は白を左にして結びます。

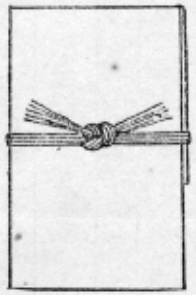
細工用の水引

金銀、紅、竹の葉「青四筋、白一筋」松葉「元結を青く染めたもの」、五色「一筋づ

第三図

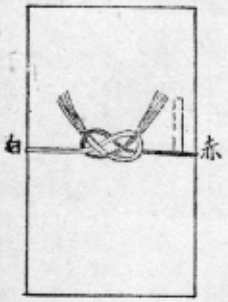
眞結び

第四図



凶事用眞結び

第五図



鮑結び（切りのし）

つ異つた色を五筋束ねたもの」奴「絹絲を巻いたもの」赤、黄、紫、時、藤、桃、青、緑、等種々の色があります。

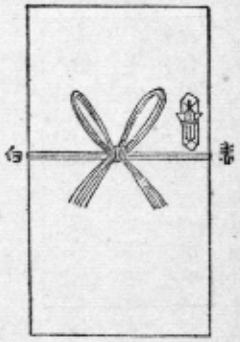
水引の結び方

結び方には樣々のものがありますが、其の基礎となるものは左の四種で其の他は應用したものであります。

眞結　此の結び方はコマ結びとも申しまして、引けば引く程結び目が堅くなつて解けない結び方でありますから、二度あつてはよくない事即ち婚禮凶事などに用ひます。

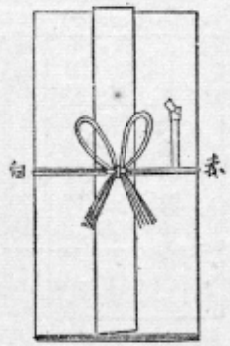
婚禮の場合は華やかな水引を二本で結び其の先は切らずに、一筋〳〵に目打か箸の如き細い物の

第六圖



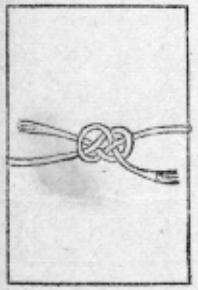
一本の蝶結び（折りのし）

第七圖



二本の蝶結び（結びのし）

第八圖



逆鮑結び

先きで卷いて置くか（第三圖）又は、大きく輪にして置きます。

凶事の場合は白又は白黑の如き凶事用の水引一本で結び、其の先きは必ず切つて置きます。（第四圖）

鮑結　此の結び方は凶事以外には何に用ひても差支へありません、水引は紅白其の他の華やかなものを用ひ、其の先きは婚禮には卷くか、又は大きく輪にするか致します、普通は切つても宜敷いのであります。（第五圖）

蝶結　此の結び方は花結びとも申しまして、引けばすぐに解ける結び方でありますから、婚禮や凶事の如く、二度あつては惡い事には用ひません

が其の他の祝や、普通の贈答品には何に用ひても差支へありません、水引は赤白、其の他華やかなものを用ひ、水引の長短と品物の大小とによつて一本又は二本で結びますが何れでも差支へありません。（第六、七圖）

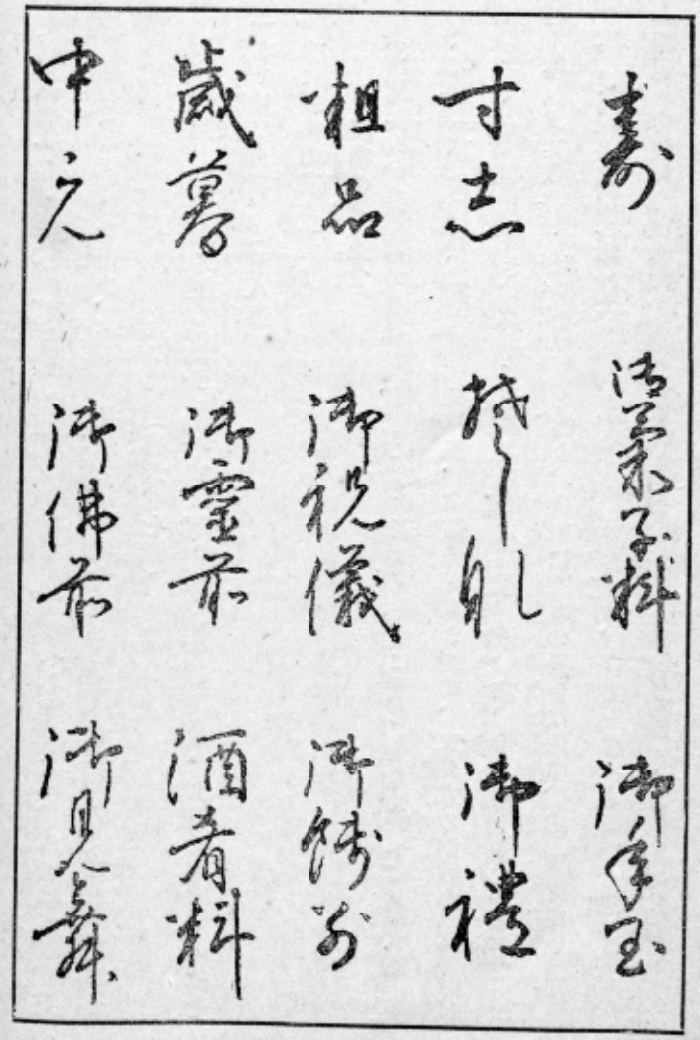
逆鮑結　此の結び方は凶事に關する場合の他は用ひません、水引は凶事用の物を一本で結びます。（第八圖）

次に表書の書き方について述べませう。

表書の書き方

表書は贈答しやうとする意を明瞭に書き表はすやうに致します。例へば餞別、御年玉、御中元、御歳暮、御土產、御見舞、御禮等と書きます、又先方の御祝ひの場合は御祝儀、壽、等と書き、自家に祝ひの場合は內祝、祝、壽、等と書きます。先方に凶事の場合は御靈前、御供物料等と書き、自家に凶事の場合は忌明、志等と書きます。

自作の手藝或は自製の茶などを進物とする場合は、自製と書くもよいと思ひます、書く字に因る場合は粗品よりは呈、呈上、松の葉などがよろしいのであります。



表書の位置

表書は上の中央に書きます、先方の名を書く場合は上の左に、又自分の名は下の左に自書するのが本體でありますが、名刺を用ひる場合は取れぬやうに糊付にして置きます。金錢を贈る場合には包紙の中、又は裏に其の金額を「一金何圓也」と記し置きます、すべて書體は楷書で墨筆を本體と致します。

熨斗

熨斗は鮮魚、干魚、鰹節、壽留女、卵、肉、鳥等の動物製品や、凶事に關する場合には添へません、其の他の場合にはすべて添えますが、折熨斗、結熨斗、切熨斗の何れを用ひても差支へありません。

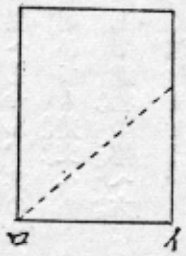
以上で進物の拵へ方についての大體を終りましたから、これから一つ一つについて委しく述べませう。

折紙と水引の掛け方

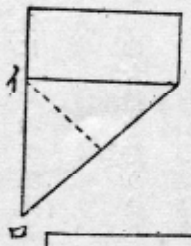
金銀包　金銀包とは金銀を他家へ贈る金貨又は銀貨を包む折紙の名稱で、此の折り

方は金銀貨が飛び出す心配がありません。之れにかける水引の種類によつて吉凶何れの場合にも差支へありません。

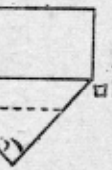
第九圖



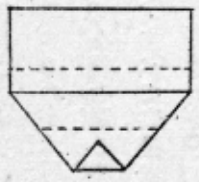
第十圖



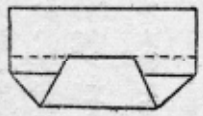
第十一圖



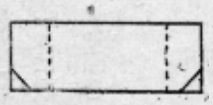
第十二圖



第十三圖



第十四圖

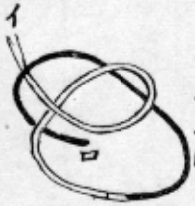


材料　小奉書を一枚、紙の折り方は紙の表を外に第九圖の如くにします。第十圖の如く(イ)の角を第九圖の點線に倣つて斜に折ります。第十一圖の如く第十圖の點線の處から折ります。金は(ハ)の所に入れるものですから、金の大小によりまして、第十一圖の點線

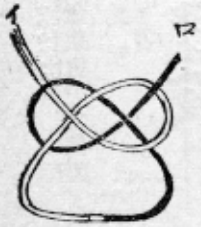
鮑結びの結び方

第十五圖

第十六圖



第十七圖



の大きさを定めて、包んだ金の高は第十二圖の三角形の所に記入いたします。第十二圖の點線で示されてある通り、殘りの幅を三等分して、第十三圖の樣に折り、更に折ると第十四圖の樣になりますから、裏の丈の中央で上下の兩端が四分重なり合ふ樣に裏に折ります。そして折りましたものは包紙の耳が左方になつて、上下の兩端は包の裏の方で、上部の端が上になる樣に置きます。これで金銀包は出來上ります。金銀の折り方は此の他に樣々ありますが、普通一般に用ひられてある折り方で差支へありませんから略しまして、水引の基礎結の仕方にうつります。

水引の結び方

眞結と、一本で結ぶ蝶結とは、一般に用ひられて居りますから、略しまして鮑結、二本の蝶結、逆鮑の三種の結び方

妻大圖

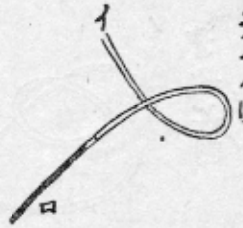
を說明致します。

鮑結　水引は凶事用以外のものならば何色でも差支ありません。長さは品物によつて定めますが、金銀貨、又は貨幣の如きものを包んだ場合は、二尺の水引でよいのであります。

結び方　水引を掌で一二度しごき少ししなやかにして第十五圖の如く(イ)一方の端を輪にして、第十六圖の如く(ロ)が輪の下を通り(イ)の上を通り、更に輪の左下を通つて、次に輪の中央で下側をすくひますと、第十七圖の如くなります。之れをしめながら水引の一本一本を平に致しますと、第五圖の如く鮑結が出來上

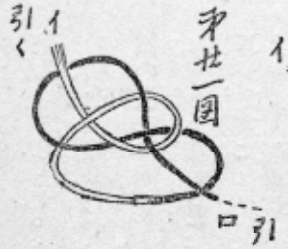
逆鮑の結び方方二本の花結び

第十八圖

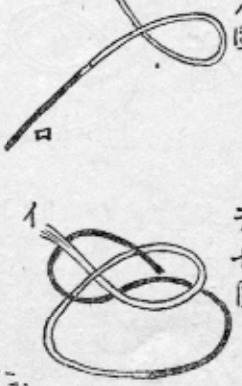


第十九圖

第廿一圖



第廿二圖



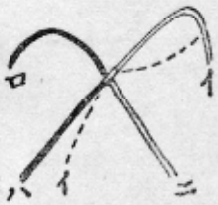
ります。此の先は第三圖の如く卷いても、或は長いものは大きく輪にしてもよいのであります。

逆鮑　水引は白、白黑、其他の凶事用のもので、長さは金包は一尺五寸か、二尺でよいのであります。

結び方　水引を一二度しごき、しなやかにして、第十八圖の如く一方の端を輪にし、第十九圖の如く他の一方を輪にして(イ)の下を通り第二十圖の如くし(ロ)の端を第二十一圖の如くくぐらして、しめますと第八圖の如く出來上ります。兩端は包紙の横に出ない程度に切つて置きます。

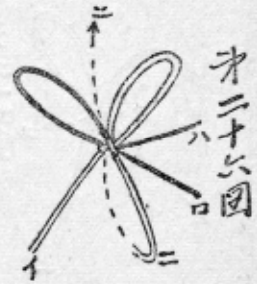
第二十二圖

第二十三圖

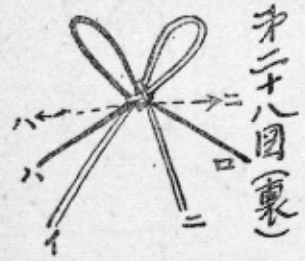


第二十四圖

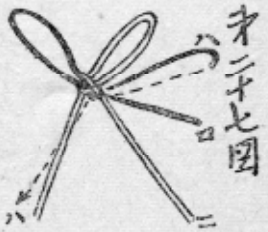
第二十五圖



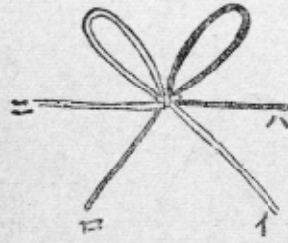
第二十六圖



第二十八圖（裏）



第二十七圖



第二十九圖（表）

蝶結　水引は凶事用以外は何を用ひても差支ありませんが、此の結び方は婚禮と凶事には用ひませんから、一般に赤白の水引を用ひます、反物などには二尺を二本、箱入の反物などには、二尺五寸を二本用ひます。

結び方　赤白二尺の水引を二本しごき、一本は赤を上に右手に持ち、一本は白を上に左手に持ち之れを更らに、二本並べて縦に持ちこれを左の手にまとめて、帶（中央の色の境目）を持ち、中央から

上の端までの部分が三等分されるやうに右の拇指をその間に挾んで輕く第二十二圖の如く丸い折目をつけます。次に二本並んで居た左の方の水引が上になり右の方の水引が下になる樣にして一本づつ左右の手に持ち、第二十三圖の如く十文字に重ね、點線の如く（イ）を曲げ第二十四圖の如く（ロ）も曲げて輪を作り、第二十五圖の點線の如く（ハ）を左横から向ふ側に曲げ、帶の上の所から折り、帶が向側になるやうに第二十六圖の如くし、次に（ニ）を（イ）と（ロ）との間の下から上に向つて帶の上から折り、帶と帶とが向側で十文字になる樣にし、更らに二十七圖の如く（ニ）を上から下の方へ少し右斜に折り、第二十七圖點線の如く（ハ）を（ロ）の帶のそばの赤い輪に通して引きしめますと、第二十八圖の如く赤白とで石疊が出來ます。此の向ふ側は帶が十文字になつて居ります。

之れで結び上りましたから、第二十八圖の（ニ）と（ハ）とを點線の樣に兩横に強く引き裏返しますと、第二十九圖の如く白の輪が左に赤の輪が右になりまして、之れが表側であります。

品物に掛けるには(ニ)と(ハ)とを品物の裏側に廻して其の端を眞結に致します。そして(イ)(ロ)の端を揃へて切つて置きますと、第七圖の如くなります。

新型編物と手藝

終

圖入說明 新型編物と手藝

(定價壹圓二十錢)

昭和二年十二月廿五日印刷
昭和三年正月七日發行

著作權所有

著者 大妻コタカ

發行者 東京市神田區三崎町三ノ一七四 宇野共次

印刷者 東京市神田區錦町三ノ一八 白井赫太郎

印刷所 東京市神田區錦町三ノ一八 精興社

發行所 東京市神田區三崎町三丁目一七四番地 大興社 振替口座東京五三六八九番 電話九段一五六七番

大妻女學校々長大妻コタカ先生著

和洋裁縫講義

菊版洋裝口繪寫眞及挿畫入

縫は女の生命であり母としての資格であります。本書は大妻校長苦心の著で和服裁縫手ほどきから つぎはぎ、エプロン、刺繍、前掛及び男女小兒の洋服のいろいろな形の縫方が說いてあります。

定價 金八十錢 送料六錢

大妻女學校々長大妻コタカ先生著

圖入說明 新型編物と手藝

四六版洋裝口繪寫眞及畫入

本書は大妻先生苦心の著で數百の圖を入れて生徒に敎へるやう分りよく叮嚀に說明してあり、向流行のマクラメの編方も敎へてある故本書を一讀すれば誰でもズン〳〵上達出來ます。

定價 金一圓廿錢 送料六錢

大妻女學校々長大妻コタカ先生著

日本西洋 即席料理三百種

四六版洋裝口繪寫眞及畫入

本書は御飯の炊き方から手輕に出來ておいしく頂けるお料理及來客の時に先生の實地研究から發表されたもの洋料理に特に見なれぬお料理が出來ます。

定價 金八十錢 送料六錢

大妻女學校敎諭住田玉子先生著

家事と禮儀作法

菊版洋裝口繪寫眞及挿畫入

無作法な女程みにくいものはなく、禮儀正しい婦人程立派なものはない。本書は立方、坐り方、食方から婚禮葬祭に至る迄の食べ方和洋食の種々を說明し日常家事のこと迄敎へてあります。

定價 金七十錢 送料六錢

大妻女學校講師久野連峰先生著

獨習 秘傳 生花の講義

菊版洋裝寫眞挿畫數十葉入

活花は趣味として面白くまた婦人の人格を養ひます。本書は各女學校の講師や道具から花の種類や活け方盛花迄を寫眞數十葉入れて說いてあります。

定價 金七十錢 送料六錢

銀座美容院主早見君子先生著

見違へる程美しくなる 美容法と結髮

四六判洋裝三百餘頁挿畫數十入

本書は讀賣新聞社が激賞した如く、著者は銀座美容院長として絕えず流行の先端を行く婦人の仕方を圖解入りで說明した婦人の必讀書

特價 一圓〇〇錢 送料十錢

東京市神田區三崎町三丁目 大興社 振替口座東京五三六九八番

帝國中學會主事宇野共次先生著

名士の青年時代

三六判洋裝美麗名士寫眞入

偉人名士の活躍を知らずして成功を口にする勿れ、偉人名士の熱と涙の物語り眞に生きた教訓である。本書は現代一流名士二十餘名の小說より面白い寫實物語りを集錄す。

定價 金八十錢 送料六錢

帝國中學會主事宇野共次先生著

男女必讀 夫婦大學

四六判洋裝鵬模樣

戀愛の勝利、理想の結婚なしたき人は是非一讀あれ！本書は夢幻的快感、三角隅係の惱み、性解剖、性問題、異性の心理を解剖し愛される秘訣を面白く說いてある。

定價 金九十錢 送料六錢

山內秋生先生著

立志小說 新生の扉

三六判洋裝鼠美本

片田舍に生れた一青年の奮鬪努力の物語で、其裏面には西洋と日本の大戰爭があり、愚師もあれば可憐な少女もあり生別死別、又は滑稽もあり遂に榮冠を頂くまでの波瀾萬丈の物語り！

定價 金八十五錢 送料六錢

山內秋生先生著

少女物語集 月夜の嘆き

四六判洋裝五色刷挿畫數葉

青い月夜に忍び泣く少女は誰でせうか、この物語をよんで泣かぬ人はありますまい、本書は山內先生の心血を注がれた名著で、長短二十餘篇に數十人の少女の境遇と運命を寫したもの？

定價 金八十錢 送料六錢

山中靜也先生編

吹方と曲譜集 ハーモニカ獨習講義

四六判洋裝鼠皮切

讀書に疲れた後月の光る夜ハーモニカを吹奏する事は樂しみかれぬ。本書は音樂の方程式と香譜の讀方迄敎へてある。故少しも器械の說明は書かれず吹うやうになる。

定價 金六十錢 送料四錢

病院長齋藤次六先生著

看護と手當法 通俗醫學全書

三六判洋裝金文字入美本百餘頁

本書は看護法、醫師の職務迄の手當法まで詳說してあり、向きは一層親切に說明してある。

定價 大特價提供 一圓七十錢 送料十錢

東京市神田區三崎町三丁目 大興社 振替口座東京五三六九八番

西村渚山先生山中静也先生共著

短歌と俳句の作り方

三六判洋装竹の模様の面白い美本

自分で感じたものを無駄なく作ることは非常に面白いものである。本書はその作り方を始め名歌や名句の鑑賞、解釋、歴史、色紙短冊の書方までかんでふくめるやうに詳說してある。

定價金九十錢 送料六錢

高濱虛子先生序長谷川零餘子氏編

袖珍 俳句歲事記

菊判半截横綴金字函入美本百餘頁

(一)いろはでひける(二)新題を選擇し(三)季題を整列に苦心し(四)一題毎に(五)明つき(六)一々例句を添附すこの花やあの鳥は美しい上其の五大特色を有し詳說す。

定價一圓二十錢 送料八錢

青山師範教授西脇吳石先生著

連成 ペン字大鑑

四六判洋装上質紙簿記の書方から初心者もスラスラ上達が出來る。

現代はペン書きの時代である。本書はペン字の書方より和字英字筆記の書方まで最新最百及び手紙封筒葉書、日記などの新練習法によつて數へてある。

定價金八十錢 送料六錢

久留島武彦先生序松美佐雄氏著

式辭挨拶 卓上演說法

四六判洋装金文字函入美本三百餘頁

雄辯弱能の世となつた。如何に學識があつても演說や挨拶が下手では到底世間が入會其他總べての會合には演說會集會在會で青年會員の仕方が本書は東西郷名士の雄辯集までの會合である。

大特價提供金八十錢 送料八錢

日本青年社編

職業相談 立身案内

三六判洋装美本三百餘頁

一生の方針は先づ自分に適した職業を選ばねばならぬ。本書は新時代に最も有望な男女の職業を紹介し、その上職業の秘訣、賃金收入、就職の手續及びどんな職業が利益あるか能說明す。

定價金八十五錢 送料六錢

日本青年社編

受驗準備問題解答 明解算術獨習

四六判洋装眼美本三五〇頁

受驗準備！立身成功！各學校の試驗に必ず出題される算術上手でなければならぬ。會社の事務員、其他實業家は算術が面白いと習ふうち自然上達出來る者に對し少しも難氣が出ず

大特價提供金八十錢 送料六錢

東京市神田區三崎町三丁目 大興社 振替口座東京五三六八九番

4
4